

東方紅夢想～Red・Dreams～

漸々夢

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「つまらない。」人生というのに飽きてしまった高校生の三紗亜衣夢。トラックに引かれそうになった猫を助けたことがきっかけで亜衣夢の人生は一変してしまう。

忘れられたモノたちの楽園、『幻想郷。』そこで広げられるのは非日常的な毎日の連続。そんな中で凡人な亜衣夢はどうやって生き抜くのか……亜衣夢の第二の人生がここで始まるのであった。

はい、始まりました。私の糞小説。

私かなりの気分屋でして更新はほぼ気分次第ですが一ヶ月以内には必ず投稿、基本ペースは二週間という戒めをしましたので。

所詮ただの糞餓鬼が書いた程度の小説なので言語力は底辺です。あとこれは私を亜衣夢としてやっていますのでこいつが幻想郷に行ったらこうなるのだな。と思ってください。

初見の方はここから見なくていいです。

バックアップ…ありがとうございます。ほんとに教えて下さり。  
おかげで復帰することができました。感謝感謝感謝でございます。

目次

第二の人生	1
紅魔館	11
一員になりて	18
初仕事	26
絶対絶命	36
弾幕ごっこ	47
踏んだり蹴ったり	58
荒修行	70
能力の開花	84
七色の魔法使い現る	97
妹様とお散歩	111
妖精メイド	122
大図書館	132
V S 魔本	143
再び人里へ	154
天人襲来	167

## 第二の人生

やあ、初めまして皆さん！三紗亜衣夢（みしや あいむ）です！新小説で早速ですが一言だけ言わせてください！

ここ何処だよ

亜衣夢はいつの間にかどこかもわからない水辺の近くにいたのだ。そこからくる冷気に亜衣夢はブルツと震えあがった。周りにあるものは湖らしきとこと森ぐらいであった。

いやいやいやいやー！なんでだ！なんで俺はここにいる!?思い出せ・・・ここまでの経緯を！

・・・そうだ!!たしか俺は……

く時は遡り、数刻前く

「行ってきやーす。」

「行ってらっしやーい。」

俺はいつも通りの時間に起きて飯食って用意して、家を出たんだ、  
それで家からすぐ近くのバス停まで歩いていったんだよな……

「ううっ、寒っ。……はあ、今日もまた学校か。なんか、つまんねえ  
な。こうやって同じことばかり……。なんかねえかなホント。」

こんな感じのことを呟きながら俺はバス停にある椅子に腰をかけたんだ。  
それで……。そうだよ！そこで……

「……。本当に遅えなバス。はよこーい。」

俺は暇なもんだからスマホいじってて、すると、

ニヤア

つていう声が聴こえてきたんだ。だから俺はつい顔を上げた。するとそこには仔猫がいたんだ！生まれてから結構たつたぐらい、生後半年つてところか？

「・・・珍しいなこんな所に猫なんて。（こつち来ないかな・・・撫でくりまわしたい）」

そんな軽いことを思っていた、だけどそこで起きたんだよ。

周りに響くぐらいの大きなエンジン音と共に、大型トラック迫ってきたんだ。

俺は焦ったよ。なんでかって？そりやアレが普通に走ってるだけならうるさいだけですむよ。けどな、アレの通り道に、仔猫がいたんだよ。

「!?あ、危ない！」

俺は何も考えずに飛び込んでいったよ。走って、飛んで仔猫キャッチ！からの全力前転!!

ゴン!!!

「~~~~~い、痛てえ・・・」

どうやら勢いあまって向かいの壁にクラッシュしたらしい。俺はその後に聞いたトラックのクラクションの音で我に返って急いで確認した。

ニヤア

この声を聞いた瞬間もう安心したのなんの！助けることに成功したんだよ!?!もう力抜けて立てなかつたよ！

「……あれ?こいつ、怪我してたのか。」

よく見るとこいつ、足に怪我を負っていた。これなら避けれんわ。

「……どうするか。こいつ。」

選択肢は3つ

①見捨ててバスを待つ

②治療をするため家に持ち帰る

③……だめだ、思いつかんかった。前言撤回2つな。

学校に行くためにバスを待つ?いや、それではこの猫が死ぬかもしれん。(大袈裟)

家に帰って治療?んなことしたらバスに乗り遅れてめんどいことになるよな……

「……お前、どうしたい?」

……ミヤオウ

「よし!しょうがないな!そんなに助けて欲しいなら助けてやろう!仕方ないよね!学校遅れるぐらい!!助けるためだものね!!はっはっは!」

それで俺は決心(?)して家に持って帰ったんだよな……



「ただいま!!猫が怪我してたから帰ってきたぜ!!」

「返事がない、ただの屍のようだ。」

「だ、誰もいないのね・・・」(うわっ、めっちゃ恥ずかしい・・・) しばらくそこには静寂が続いた。それに耐えられなくなった亜衣 夢はやつとのことで行動に移した。

「誰もいないなら好都合。今のうちに治してやるからな。」

ニヤーン

〈少年治療中〉

「・・・よし!終わりだ!」

ニヤオ

「いやー良かったわー特に何もなくて。」

傷はそこまで酷くなくて俺でも治せるほどだった。その後冷蔵庫にあったツナ缶食わせたらまあ食うこと食うこと。よほど腹減ってたんだなと思ったよ。

「・・・あれなんか忘れてあああー!!そうだ!学校に連絡してねえ!今何時だよ・・・」

「そうだ!このあと俺は・・・」

「・・・あれ?なんだ・・・急に・・・眠気・・・が・・・」

俺はそのままリビングに倒れてしまったんだ。そっからどうなったっけな・・・あ、そういえば・・・

「……………?なんだ……………どこだここ……………?……………何か、いる?」

亜衣夢は目を覚ました。あたりは薄暗くなっていたがそれには驚かなかった。それよりも強い衝撃を目のあたりにしたからである。

「……………?!だ、誰ですか!?!あなた……………達は!」

亜衣夢の目の前には金髪の女性二人がたっていた。さらに亜衣夢はリビングで寝たはずなのにいつの間にか寝室にいたのだ。

すると亜衣夢が起きたことに気がついたのか長髪の方がこちらに目を向けて話しかけてきた。

「あら?起きたのね。驚かしてごめんなさい。私は紫、『八雲 紫』やくも ゆかり)よ。こっちの方は藍(らん)よ。」

「どうぞお見知りおきを。」

「あ、これはどうもご丁寧じゃないですよ!!!」

「あら、なかなかのツツコミね。上手いわよ。」

「あ、ありがとうございます。ってそうじゃないです！どっから来たのですか！どうやって来たのですか!?!そもそもなんで俺の部屋に!?!  
そして何者!?!」

「ずいぶん注文が多いのね。まったく。」

「いやいや全くって・・・」

「まずどこから来たかというところの世から忘れられた者達の集う美しくも、残酷な『幻想郷』から来たのよ。」

「げ、幻想郷?てか忘れられた者達ってなんですか?」

「つまりはここの現代で使われなくなったもの、科学的に証明されてしまい存在を消されたもの、寂れてしまった者達者達のことよ。」

「た、例えばなんですか・・・?」

「そうね、一番みじかなものは『妖怪』かしら?」

「え?よ、妖怪ですか!?!」

「そうよ。ちなみに私も妖怪よ。周りからはスキマ妖怪とか言われているわね。藍は妖怪というよりも『式神』ね。」

「・・・」

「紫様・・・あの者は呆けております。」

「・・・凄いです。」

「え?」

「凄いですよ!妖怪がそこにいるのですね!!」

「え、ええそうですよ。」

「あ、なんかテンション上がってきました!」

(紫様・・・この者、おかしいですよ。)

(いいじゃない、これもこれで面白いし。)

(・・・)

「亜衣夢、これでもう私たちが何なのかわかったわね。」

「あ、はい、ある程度は・・・」

「あなたは今日の朝、仔猫を助けたでしょう。」

「!な、何でそれを?」

「実はあの猫、私の猫なのよ。」

「え?でもあなたたちはあつちの」

「だから助けてくれたお礼に、あなたをつまらなくない幻想郷へご招待しまーす☆」

「はいい!?!いや待ってください」

「待ちませーん。」

ヴォン

「へ?ぎえあああ!なんですかこれ!?!目玉がいつぱいのこの裂け目は!!」

「これが私の能力よ。さあ、あなたに拒否権はありません。」

「いやそれなら準備させ」

パクツ

「チキショーウ!!」

「亜衣夢ー、幻想郷にいたらとりあえず『紅い館』を探しなさいそこがあなたの目的地ですからね。」

「・・・紫様・・・よろしかったのでしょうか?伝えなくても・・・」

「いいのよ。あれで。真実はいずれ解るわ。時が来るまで、待つだけよ。」

「・・・はい。そういえばどこに飛ばしたのですか?」

「・・・あ、適当にやっちゃった。」

「え?」

その頃亜衣夢は・・・

「あああ！何じゃあこりゃあ!!あたりは目玉だらけだしめっちゃ暗い!!怖いの一言に限るよほんと！しかもなんかふわふわするのが余計気持ち悪い・・・いつまで続くんだ——」

ペッ

「ぶぎやー！・・・いつてえー・・・何なんだよ・・・って。」

顔を上げりやそこは見たこともない湖の近く。俺はついに、『幻想郷』にいたんだって実感したよ。

「・・・すべて思い出したぞ!!ちくしょうが！こんなどこかもわからんところに投げ捨ておって！まじ激おこー！」

亜衣夢はしばらく怒り続けたが無駄とわかりすぐやめた。

「・・・とりあえず、紫さんの言ってた『紅い館』に行ってみるか。」

ようやく重い腰を上げて亜衣夢は立ち上がった。周りをよく見ると湖の近くに蝶を擬人化して大きくしたもののようなのが沢山いて興味を注がれたが今は無視した。適当に前に進んでみると、何か紅い建物と共に気持ちの悪いオーラを感じ取った。

「・・・あそこ、なの？・・・すっげえ行きたくねえ。でも・・・行くしかないよな。」

こうして、亜衣夢の幻想郷での生活が始まったのだった。



## 紅魔館

湖から歩くこと10分ぐらいのところで、ついに目的の建物の全貌が明らかになった。

「……………な、なんだこれは…………！」

亜衣夢が目のあたりにしたのはとてつもなく巨大で壁の色がすべて深紅な、館であった。さらにそれは凡人の亜衣夢でさえわかるような禍々しく、怪しいオーラを放っていた。

「これ、青○だったら閉じ込められてバクツ！だよね…………」（足めつちや震えてる）

どうする？ほんとにここでいいのか？紫さんはそう言ってたけどな…………って！なんで俺あの人（？）のいうとおりにしてんだ!?あんな怪しさの塊の人の！い、今からでも間に合うか…………？

引き返そうとした亜衣夢の足は、あるものを見て止まった。それは、5mは軽く超えるであろう城壁（？）の門のところに、人がいたからである。

「ひ、人？あそこにいるっていうことは、門番の人かな？とりあえず、話を聞きに行こう！」

亜衣夢は急ぎ足で門番であろう人の近くによった。その人はとても変わった服装をしていた。長身で長髪。さらに昔のテレビであったような、チャイナドレスらしきものを着ていたのだ。

亜衣夢は中国のファンかなとか思いながら話しかけた。  
しかし、なにやら様子がおかしいことに近づいてやつと気づいた。

「……………」

「あの…………あれ？返事がない…………？すいませーん！」

「……………」

「もしもーし!!」

「……………」

こいつ…………寝てるぞ！いいのかよこんな門番で！これじゃあただのオブジェじゃん！そうか、そうですか。こうなりや、地声の大きさを数々の人に怒られてきた俺の本気見るがいい！

亜衣夢は肺にある空気をすべて吐き出し、代わりに真新しい空気を取り入れる。しっかりと吸い込み、それを全力で吐き出した。

「すーい！m」

しかし、その時

「起きろゴルアア!!!」

「ぐっはああ!!」

「何事ぞ!!!?」

いきなり短銀髪で、メイドのような格好の女性が、突如現れこの門番の人の側頭部目掛けて飛び蹴りをあびせたのだ。これには亜衣夢も驚き啞然していた。

「な、何をするのですか!?!ひとが寝て…………見張りをしてるというのに!!」

「じゃあなんでお客様がいらっしやっっているのに何もしないのかしら!?!」



「へ？・・・(亜衣夢の方を見る。)」

「・・・(中華の人と目が合う)」

「あああ!!も、申し訳ございません!!お客様を待たせてしまい!」

「・・・美鈴、後で話があるから・・・」

「は・・・はひい・・・(あ、死んだ)」

こ、怖え・・・え？何この人？いきなり現れて飛び蹴りつすか？躊躇とかないんすか？ていうかその人もなんで生きてるの？怖いよ、両方怖いよ。

そんなことを思っていると、メイドらしき人がこちらを向いたのだ。亜衣夢は思わず身構えてしまうが向こうは頭を少し下げて挨拶をしてきた。

「申し訳ございませんでした家の門番が。どうぞ、中にお入り下さい。用件などはそこで聞かせてもらいます。」

あ、申し遅れました。私はこの、『紅魔館』のメイド長を務めさせてもらっています、『十六夜 咲夜(いぎよい さくや)』と申します。それでは、ついてきてください。」

あ、自己紹介させてくれなかった。(ω、)てか礼儀正しいね、この人。

そんな訳で、亜衣夢はこの、『紅魔館』に入れてもらうことが出来た。中に入ると外観通りの広々とした空間が広がっており変わらず壁などは深紅であった。

一言も会話が無いまま亜衣夢は客室まで連れてこられた。

「・・・それでは、まずはお名前を伺わせてもらいます。」

「あ、はい、三紗亜衣夢です。」

「亜衣夢様ですね。どういったご要件でここにこられたのですか？見たところ里の者ではなさそうですが。」

「あ、自分はなんて言うのでしょうか、外の世界？から来たのです。」

「あら、そうでしたの？」

「それで・・・紫とかいう人からここにいけど。」

「・・・あのスキマBBAm」

「へ？」

「失礼しました。・・・お嬢様の言う通りでしたわ。」

「はい？」

「何でもありません。それでは、あなた様は今日はこちらにお泊まりください。」

「え？いいのですか？（てか隠し事多すぎだろお）」

「はい、まさか野宿をさせるなんてことは出来ませんので。」

え？なに？やばいの夜わ？おれもしかしたらこちら辺で野垂れ死にしてたのかな？

「では、ここで少々お待ちください、館の者全員に伝えてきますので。数分で戻りますので。」

「わかりました。」

と言うと咲夜はドアを開け、出ていった。亜衣夢はほの直後にあることに気がついた。

「え？数分で戻れるの？」

およそ2分半

「ただ今戻りました。」

本当に戻ってきたよこの人

「お嬢様があなたに話したいことがあるという事なので、付いてきてもらいます。」

「え？は、はい・・・」

「こちらです。」

いきなりこの主に会えるのか？・・・どんな人（絶対人じゃないだろうな。うん）何だろうな・・・

「つきました。」

「はやっ!?え？まだ歩いて数秒ですよ?」

「遅れましたら怒られてしまうので、少しいじらせてもらいました。」  
え?なんて?いじる?何を?

「決して粗相の無いようにお願いします・・・機嫌を悪くしたなら、あなたは今日の晩餐になりますので。」

「・・・(絶望)」

コンコン

「お嬢様、お客様をお連れしました。」

「・・・いぞ、入って。」

「失礼致します。」

「し、失礼致します?」

「・・・ふーん、お前が亜衣夢とやらか。」

「・・・(絶句)」

亜衣夢が見た者は、見た目10歳ぐらいで白いドレスらしきものを着ており、背中からはその体より大きな蝙蝠を彷彿とさせるような翼があり、亜衣夢が館に入る前に感じた、禍々しい気の発生源であった。

「ようこそ、紅魔館へ。私がこの主、『レミアア・スカーレット』だ。お前のことは聞いています。外から来たんだってな?」

「そ、その通りです。」

「早速だがお前、元の所へ帰りたいか?」

「……!」

「私ならお前を元の世界へ返すことが出来る。どうする? 帰りたいか? それとも、幻想郷に残るか?」

「そ、それは……」

「早く決めろ。」

「え?」

「私は長い時間待つのは好きだ。だがな、刹那のような時間を待つのは嫌いなんだ。だから早く決めろ。」

「……」

ヤベエ……これ俺死んだぞ……は、早く決めなくては! だがどうする?

① 帰る……元通りのつまらん日常が待ってるよ♪

② ここに残る……この何もわからない土地でどう生きていけと?

駄目だ……決まんねえ(´・`・´) 早く決めないと、殺される……

「まだか?」

「はい! もう少々お待ちください!」

「後1分ね。それで決めなさいよ。」

くそう! 時間制限された! ……ん? 待てよ、ここってあれだよな、すぐくでかい館、つまり使用人とか必要なんだよな。……これだ!

「時間だ、答えを聞こう。」

「俺は……いや、俺を……」

「ここで働かせてください！」

## 一員になりて

「俺を……ここで働かせてください！」

「……」

だ、ダメかやっぱり……

「……フツ」

「え？」

「お前、本当にそれでいいのか？」

「……はい、決めましたので。」

「連載3話目でもうそんな事言って」

「メタイ！メタイよ！」

「お嬢様……そういうところには突っ込んではいけません……どこぞの底辺無能愚主の発想が皆無なのですから。」

「あら、ごめんなさい。」

「ちよつと咲夜さんまで!?!やめてあげて！いろいろとアウトだから！」

「ふふふ、お前の心意気、気に入ったよ。」

あ、無かったことにした。さっきまでの投稿ギリギリアウトな会話を無かったことにした。

「いいだろう。お前は今日から紅魔館の一員だ。」

「……まじで?…… よっしやあ! 決まったぜい! 面接とかなしかな? とりあえず yes!!」

「そして、私の奴隷となった。」

「……あれ? なにかおかしい単語が聞こえたぞ?」

「咲夜、今すぐ晚餐の準備を。そして館の者を全員食堂に集めて。こいつの歓迎パーティーよ。」

「かしこまりました。それでは、お先に食堂で待っていてください。」

そう言うとき咲夜は颯爽と歩いて一礼してから失礼致しました。と言いつつこの部屋から去っていった。

「よし、亜衣夢行くわよ。」

「あ、はい。」

亜衣夢はレミリアの後について行った。来る時とは違い、そこまでの道のりは少々長いものだった。大した会話も無く、亜衣夢とレミリアは食堂までたどり着いた。やはりここも広い所で何10人来ようとこの席が埋まることはない。それぐらいの広さだった。

「さて、亜衣夢よ。」

「は、はい。」

「なんだ? いきなり改まって? 何が起きるんだ?」

「他の奴らが来るまで私は暇だ。」

「あ、これってまさか……」

「だから、なんか興味の出るような話をしろ。」

「oh……ですよねえー」

「え……話、ですか。」

「そうだ。なんか言え。」

「そうですね・・・あ、じゃあ自分のいた世界についてはどうですか？  
こっちとあっちではいろいろと違うようなので。」

「・・・ふーん、面白そうね。話して。」

「わかりました。」

く少年説明中く（ただの手抜き）

「・・・と、このようにこちらの世界ではこのようなものがあるのです。」

「ふふ、なかなか興味深かったわ。だいぶ暇つぶしになったわ。」

よ、良かったあー。ここでもしミスっていたら・・・ゴクッ

すると、ドアの向こうからなにやら話し声が聞こえてきた。それで  
やっと館の者達が来たということが分かった。

そしてドアをノックする音と共に咲夜の声が聞こえてきた。

「お嬢様、ただいま連れてまいりました。」

「ふっ、ご苦労。中に。」

「失礼します。」

ここで亜衣夢はまた驚くことになったのだ。何10人来るかと予想していたのだが、なんと来たのは咲夜と門番の人を含め、2人しか来なかったのだ。



「・・・え？この人達だけですか？ここにいる人つて。」

「亜衣夢よ、あといるのは役立たずな妖精メイドだけだ。呼ぶ必要が無い。」

「はい？妖精メイド？」

「まあそんなことはどうでもいい。さあ、自己紹介をしろ。美鈴、やれ。」

「さ、早速ですか!?!・・・えーと、私は『紅 美鈴（ほん めいりん）』といいます。仕事としてはこの門番と花の手入れ。ですかね。」

「よろしく願います、美鈴さん。」

「・・・」

「・・・？美鈴さん？」

「いえ、こんな良い扱いは久しぶりなものでして・・・」

「この人、どんな待遇してんだよ普段。」

「次、パチエ。」

「はいはい・・・私は『パチユリー・ノーレッジ』よ。普段はこの地下にある図書館にいるわ。」

「と、図書館があるのですか!?!」

「ええ、もし暇があったら来なさい。案内してあげるから。ああ、そうそう。この子は小悪魔。私の使い魔よ。」

「パ、パチユリー様！私の紹介を取らないでくださいよ!」

「みんな『コア』って呼んでるからそう読んであげて。」

「ぜ、全部持っていった・・・」

「え、ええと、よろしく願います。」

「よろしく。」

「うう・・・よろしく願います・・・」

「流利的に私ですね。もう一度言いますが私は十六夜咲夜です。このメイド長を務めています。妖精メイドをまとめています。」

「そして私がレミリア・スカーレットよ。ここで一番偉い。OK?だからあなたは私のことはお嬢様と呼び。」

「お、OKです。お嬢様・・・?」

「よろしい。」

「お嬢様、妹様も連れてきますか・・・？」

「・・・駄目。亜衣夢が危ないわ。咲夜、亜衣夢がこの住人になった事をフランに伝えて。」

「いいのですか？」

「明日私もついていくわ。」

「・・・・・・・・かしこまりました・・・・・・・・」

待て待て待て待て何の話だ。俺を無視して話進めるの本当にやめてください死んでしまいます。てかフランて誰？

「・・・よし！気を取り直して宴会の始まりよ！！咲夜、用意して。」

「もう準備済みです。」

「ふっ、流石は咲夜ね。さあ！今日は好きだけ食べなさい！」

（一同）「イエエエエイ！！」

宴会が終わったその夜（既に明け方に近いが）咲夜はレミリアの言うとおりに、「フラン」と呼ばれるものの元にいた。

その場所は紅魔館の地下牢。「フラン」は地下牢の中にただ一人で

いた。隅っこの方でうずくまっているのを見つけた咲夜は話しかけた。

「・・・妹様。少しよろしいですか。」

「・・・なあに咲夜？」

「実はですね。今日は客人が来まして。」

「誰??」

「ええ？あ、名は亜衣夢といい今日でここの住人のひとりとなりました。」

「本当？私、会ってみたい！」

「申し訳ございません、いま亜衣夢は疲れきって眠っているのです。なので明日、会えますよ。」

「ええー・・・わかった。待ってる。」

「お解りいただきありがとうございます。それでは、お休みなさいませ。」

「おやすみ。」

咲夜はこの場から去っていった。地下牢にしばらく静寂が続き、フランは眠りについた。

「・・・亜衣夢、か。」

そして、時は流れ日が昇ってきた。

そんな早朝に咲夜は亜衣夢に紅魔館の仕事についての話をしていた。

「それでは、早速仕事内容を言います。」

「は、はい。」

「まず新入りのあなたは美鈴の手伝いをしてきて。」

「え?となると、門番とかそこら辺の仕事ですか?」

「それもあるけど、まあ詳しくは美鈴に聞いて。」

「了解です。」

「あ、そうそうこれとこれを持ちなさい。」

「・・・なんですかこれ?」

亜衣夢の手に渡されたのは何かブザーみたいな物と44マグナムだった。

「ちよつと待ってください!!ブザーはわかりますけど(何に使うのかは解らないが)、これ本物の銃じゃないですか!!しかもマグナム!死にますよ!!」

「もし美鈴が寝ていたらそれをぶっ放しなさい。大丈夫、弾は入っていないから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・(汗)」

「それでは、頑張ってね。」

咲夜はさつさと仕事に戻っていった。亜衣夢は一人残され、どう使  
用もないので美鈴の元へ行ったのだった。

「咲夜さん・・・恐るべし!」

## 初仕事

「想いはー形の無いー♪儂きものー♪」

「……………」

ここは紅魔館の大庭園。そこには色とりどりの花々に囲まれて何やら歌を歌いながら陽気に世話をしている美鈴の姿があった。

「ごーまかーし通用しーない♪硝子のサイコロジ……………(亜衣夢と目が合った。)」

「……………(美鈴と目が合う)」

あれ?なんか、すっごいデジャヴ。前にもあったよなこんなの。

「……………あ、亜衣夢さん。ど、どこから聴いていました……………」

「えと……………想いは形の無いのところからですね。」

「……………(赤面)」

「……………(複雑な顔)」

「で？一体何のようなのですか？こんなところまで来て。」

あ、この人も無かった事にした。なんなの？この人は全員無かった事にするの好きなの？

「あ、えつとですね、咲夜さんに美鈴さんのところに行って仕事しろとの事で。」

「ああ、そうでしたか。」

「何をすれば良いですか？」

「そうですね……そうだ、少しの間私の代わりに門番して下さい。」

「へ？」

「いやですね、花達の世話でも良いのですがこの広さですから人間の亜衣夢さんでは大変だと思いますので。」

「ああ、はい、そういう事でしたら任せてください。」

「本当にですか？では、頑張ってくださいね。」

「あ、一つ質問いいですか？」

「はい？」

「いくら何でも新入りの俺がやって問題無いのですか？何か来ても太刀打ち出来ませんよ？」

「ああ、その時はすぐに駆けつけますので大丈夫ですよ。」

「そうなのですか？」

「安心してください！」

「……あ、はい、分かりました。」

こうして亜衣夢はしばらくの間紅魔館の門番をする事になった。花々の世話をしに行った美鈴の姿はどこか嬉しそうな感じがしたが亜衣夢が気にすることは無かった。

「……………いい天気だなあ。」

程よい日光、湖から来る冷気を纏った心地の良い微風。

たまにする鳥のさえずりに亜衣夢は魅了されていた。

それも無理はない。元の世界ではこんなにも素晴らしい場所に生まれていなかったからである。あまりの心地良さに睡魔が襲ってきたが、何とか堪えていった。

「こんな所があっただなんて……来て良かったな。本当。」

「だろ、ここは結構いい所だよな。この主人がいいセンスしてたらもっと良かったのにな。」

「いやいや、そんな事言わないで下さいよー。お嬢様だってきつといろいろと考えているのですから。」

「おお、そりゃ失敬。」

『はははははー!』

「誰だよあなたは!!!!!!」

「え、ええ?今っ頃かよー!」

亜衣夢は今更横にいた少女の事に気が付いた。少女は一見普通の姿だったが、あるおかしい点がある。一つは箒を持っている。一つは金髪。もう一つは魔女を彷彿させるような大きな帽子を被っていたこと。



「てかお前誰?？」

「あ、そうでしたね、自分は三紗亜衣夢、ここの使い人です。」

「ああ、なるほどな。私は魔理沙（まりさ）だ。よろしくどうぞ。」

「よろしくおねがいます。」

なんだこの人は、女なのに『だぜ』っていう人初めて見た。まあいい、気にするのはそこじゃない。なぜ魔女のコスプレをしているんだ。

「・・・ん?どうした?」

「あ、いえ。ちよつとその服装が気になりました・・・」

「ああ、それか。そりあ私は『魔法使い』だからな。」

「・・・はい?」

え?え?なんて?わんもあせい。ぱーどゆん?

「その目は疑ってるな?」

そりやそうだ。逆にこれ聞いて「はいそうなのですか」っていう人いるか?いねえよ。

「仕方ないな、なら魅せてやるよ。」

そう言うど魔理沙は何か六角形の小物を取り出し、それを天に掲げるようにしてこう言い放つ。

「・・・いくぜ!」

『恋符・マスタースパーク!!!』

するとその小物からは辺りに星の形をした閃光をまきちらしながら光線を放ったのだ。その衝撃と輝きに亜衣夢は言葉を失った。

そして亜衣夢の第一声は「・・・き、綺麗・・・」だった。

元の世界では確実に目にすることは出来ないであろうものを見ることが出来、亜衣夢は一瞬感動も覚えた。

「どうだ？これで私が魔法使いだつて解つただろ？さらにこんなことも出来るんだぜ！」

そう言うのと今度は其処らにある草を凍らせたのだ。これで決定した。この人は魔法使いだと。

「す、凄い……」

「ま、これくらい楽勝よ。んじや、失礼するぜ。」

「へ？いや、ちよつと待ってください！」

「なんだよ。まだ用あるのか？」

「あの、用件は一体？」

「ああ、ちよつと本を貰……借りるだけだぜ。」

ん？何か言いかけたぞ。まあいいや。

「あ、分かりました。」

(なんだ？結構楽に通れたな。さあて、今日は何を持っていこうか)

「待なさーい!!」

「うおっ！め、美鈴さん?!」

「亜衣夢さん！騙されないで！そいつはいつも図書館よ本を盗るコソ

ドロですー！」

「マジで!?!」

「げ！美鈴いたのかよ！くっここは退散だぜ！」

魔理沙は箒にまたがって颯爽と飛んで逃げていった。

「……何だったのですか？」

「亜衣夢さん、あいつは入れちやダメですからね。」

「あ、はい。」

亜衣夢は気を取り直して門番の仕事に戻った。その後は特に何もなく、ただ時のみが流れていき日も暮れた頃、やっと終わりの知らせが来た。

「お疲れ様でした。亜衣夢さん。後は私がやりますので咲夜さんの所まで戻っていつてくください。」

「分かりました、頑張ってくださいね。」

こうして、亜衣夢はやつとの事で戻っていった。

「お疲れ様です亜衣夢。・・・美鈴さぼってなかった？」

「いえ、ちゃんとしていました。」

「そう、ならいいわ。じゃあ今度は人里まで買出しをお願いできる？」

「あ、了解です。」

「地図とメモと財布はこれ。あと絶対森には行ってはダメよ。」

「解りました。」

森には行ってはダメ。何でだ？そこではちよつとスルーしたけど。・・・別にいいや、考えなくても。

亜衣夢は暗くなり始めているので急いで行くことにした。

「・・・ここが、人里・・・？」

そこはまるで江戸時代のような古さを感じさせた。機会てきなものは一切無くまるでタイムスリップしたようだった。

亜衣夢の姿は確実に場違いで周りから痛いほど注目を浴びた。歩いていると3人の子ども達が寄せ集まってきた。

「ねえねえ、お兄ちゃんは外からきた人なの？」

「え？そっだよ？」

「ほんと!？」

な、なんだこやつらは。俺が外の世界の人と知った途端目輝かせて。怖いよこれ。

「はなしきかせてよ!いろいろと！」

「ぼくもしりたい！」

「わたしも!わたしも！」

「え、いや、ごめんね。俺今買い物していて、急がないと駄目なんだよ。」

「ええー!いいじゃんちよつとくらいいー」

「けちー」

「ちきんー」

「へたれー」

「たまなしー」

「うっせえ！あるし！バツチりあるし！」

「角がりあたまー」

「ふとまゆー」

「こ、こいつら・・・ムカつく!?俺の痛いところバツチりついてきやがる・・・」

「てか角刈りじゃねえし太眉でもねえ！」

「こら。」

ゴン×3

「いったーい！」

「なにするの先生！」

え？先生？この人？

それは確実に先生、と思える姿では無かった。しかし、真面目な話し方からなんとか納得することはできた。

「すまないな。私の生徒が無礼をした。ほら、早く帰りなさい。」

『はーい。』

「いえ、大丈夫です。ははは。」

俺のLifeバツチり削られたけどな

「私は『上白沢 慧音（かみしらさわ けいね）』ここにある寺子屋で子ども達に勉学を教えている。」

「どうも、三紗亜衣夢です。以後お見知りおきを。」

「ああ、こちらこそ。それで、急いでは無いのか？」

「あ！そうでした！すいません！それでは！」

やべえ！いつそげー！遅れたら殺される!!!  
全速前進だ!!

亜衣夢は風のごとくの速さで店まで走っていった。

「・・・速いなあの者。亜衣夢か、なかなか骨のありそうな奴だ」  
「おっしやあ!!終わったあ!!行くぜい行くぜい行くぜい!!」

そして風のごとくの速さで買い物を終え、通り抜けていった。

「・・・見当違いだったな。」

「はあ、はあ、あと、少しだア・・・」

ヤバイ・・・もうだいたい暗い！これは・・・死んだ！

亜衣夢が必死の思いで走って(実際はジョグよりも遅い)いると、例の森を見つけた。その森は今にも襲いかかってくるぐらいのおどろおどろしい雰囲気であった。

たまに聞こえてくる獣のようなうめき声。梟の鳴き声。それらがさらに恐怖を煽ってくる。

「……こんな所、入られて言われても入るものか!!」

亜衣夢が紅魔館へ向かおうと方向を変えた時、亜衣夢は心臓が止まるのかと思うような体験をした。

目の前に少女が立っていたのだ

「……………!」

そこにいたのは小さな少女。一見普通の見た目。だが亜衣夢には解かった、「コレはやばい奴」だと。

少女の表情は、幼さを残しながらも狂気に溢れたものだった。暗闇からこそつと見える鋭利な歯、笑顔に隠れた闇。これらすべて亜衣夢に今まで感じたことのない恐怖を味合わせることとなった。

「あなたは…………… 食べてもいい、人類?」

## 絶対絶命

に・・・逃げろ!!

頭の中ではそう何度も言い聞かせた。しかし身体は一向に動こうとしない。足はガクガクと震えて力が入らず少し気を抜いてしまえば容易くその身体は大地に接してしまおうだろう。

「く、来るな・・・」

「ふふふ・・・」

そいつはゆっくり、まるで蛇が獲物を追い詰める時のように、亜衣夢を弄ぶように近づいてくる。幼い瞳の中には鋭い狂気と血に飢えた捕食者が映っていた。

「く、くそ・・・」

その時亜衣夢は思い出した。自分には強力な武器があることを。

そうだ・・・コイツを使って!!

「この・・・失せろ!!」

バアアアアン!!!

強烈な発砲音がした後すぐさま腕全体に激しい痺れがきた。それもそのはず、マグナム弾を発射したのだから。だがこの痛みが亜衣夢の身体を正気に戻した。亜衣夢は化物に目もふれずに急いで紅魔館まで走っていった。

「こ、これで多少は時間稼ぎが出来た!!今のうちに・・・逃げなくちゃ



!!

「……………危ない危ない。あの人類、こんなものを持っていただなんて。」

肩にごくわずかな傷を付けられた少女はおぞましい顔で笑い、すぐさま亜衣夢を追いかけた。

その頃紅魔館では……………

地下室にて、咲夜とフレンドールが話をしていた。その内容はフレンドールに亜衣夢を合わせるという感じだった。

「……………という訳なので今日の晩餐の時に会えますよ。妹様。」

「やったあ！やっ与会える！」

「では、その時まで少々お待ちを。」

「うん！楽しみにしてるね！」

「・・・遅い。」

「確かに・・・亜衣夢さん遅いですね。」

咲夜と美鈴が玄関先で亜衣夢の帰りを待っていた。しかし、辺りが暗くなっても帰ってこない亜衣夢を2人は心配していた。

「咲夜さん、まさかあの『森』に入ったんじや。」

「まさか、亜衣夢はそこまで馬鹿じゃないわ。」

「で、でも・・・」

その時だった。

バアアアアン……

「!?今のは!」

「あれは・・・私が渡した44マグナムの発砲音!」

「ええ!!き、咲夜さん!?!なに渡して・・・いや、それはどうでもいいです!つまりそれを撃つたと言うことは・・・」  
「!」

咲夜は一瞬にして一つの痕跡も残さず姿を消した。美鈴はそれに一瞬気づくのに遅れた。

「ああ！咲夜さん！先にいかないでください!!」

美鈴も急いで外にでて亜衣夢の元へ向かった。

「はあ、はあ・・・」

亜衣夢は全力で紅魔館まで走っていた。元陸上部だったので足にはそれなりの自信があった。しかしふと後ろを見た瞬間、その自信と  
いうのは呆気なく崩れ去った。

追ってきていたのだ。

さらに驚くところは走っていないところ。そう、  
飛んでいるのだ。

「あはは、それじゃ私から逃げられないよ?」

「この化物が、喰らえ!!」

バアアアアン!!!

「効かないよ。」

少女は何も無い空間から光球を発射したのだ。それはいとも容易くマグナム弾を砕いた。しかも一つではない。大量にだ。

マグナム弾でさえ歯が立たないこの攻撃に亜衣夢はただ呆然とするしか無かった。そして、

「う、うわああああ!!」

被弾した。

その衝撃は凄まじく足に当たっただけで数メートルは吹き飛ばされた。近くにあった大木に背中をうちしばらく呼吸が出来なかった。

「げほ…なんだよ、いまの……」

身体は動かない。言葉を発するのでさえ辛い。体が冷たくなっていく。恐怖に冷えているのだ。最早視界もまともではなくなってきた。なにかが近づいてくるが正体が解かっても認識できない。

「あなた外から来たのでしょ? 教えておくわ。この世界ではねそこから来た人を食べてもいいの。もちろん博麗のことかそういう所に保護されて入れれば別だけど、あなたはこんな所でうろろしていた。」

なにを言っているんだ? ……だめだ。上手く聞き取れない。

「ダカラタベルヨノヨ。」

目の前が黒色から暗い紅色に変わった。残った思考で思いついたのは、奴が口を開けたということ。

ああ、ここで死ぬのか。なんか、早かったな。終わるの。…い

や待て、ここで死ぬるか!!連載5話目で・・・主人公が死ぬるか!!!

「イタダキマ〜ス」

「そこまでよ。」

「!？」

なんだ・・・？あいつが消えた？・・・

ザクツ!!

!？な、なんぞ!？な、ナイフ？いやまて、今の声は・・・

「・・・なんだ、紅魔館のメイドか。いま食事中何だけど？」

「そう、それはごめんなさいね。でも・・・」

この声は・・・まさか・・・

「おあずけよ。」

咲夜さん!？

「これ以上亜衣夢に手を出すというなら、私が相手になるわ。」

「私は今、お腹ペコペコなの、だから、よこせ!!」

「いいわ、なら2度と空腹にならないようにして上げる。」

「闇符『デイマーケイショ——』」

「幻世『ザ・ワールド』」

亜衣夢は夢でも見ていたかのようにだった。少女が大量の光球を放とうとした瞬間、少女の前にいたはずの咲夜が、いつの間にかその背後に立っていたからである。しかし、これで亜衣夢の驚きは止まらない。その少女を覆うようにして無数のナイフが飛んでいったのだ。

鮮やか、華麗、颯爽。いくつかの褒め言葉が亜衣夢の脳内に湧き出てきた。それほどに感動したのだから。

「全く。弱いくせに向かってきて。」

「ガハ・・・」

「さ、咲夜さん・・・」

「大丈夫？ 亜衣夢。」

咲夜は全身強打して動けない亜衣夢に手を差し伸べてくれた。それをみた亜衣夢は意識を失った。

「・・・どこだここ？ あれ？ 動けない。ああそっか、あの化物にやられたんだもんね。そりゃ動けんわ。」

「ずいぶんとこっぴどくやられたようね。 亜衣夢。」

「！ その声は・・・紫さん!!」

「ご名答。どう？ もう幻想郷から出たくなかったんじゃない？ こんな目にあつたのだから。恥ずかしい事じゃないわ。」

「・・・ふっ、紫さん。なんでもお見通しのあなたでも分からないことはあるのですね。」

「・・・？」

あの程度で逃げたくなくなるほどやわな覚悟、決めてません!!俺はまだ

幻想郷に居続けます!!ここが、俺の居場所なんです!!

「……そういうと思った。」

へ?

「けど、もし帰りたいたとかそういう弱音が聞こえたら……ね?」

ハイキモノメイジマス

「では戻りなさい。あなたの第2の帰るべき場所へ……」

——  
む——

え?なんて?

——あ——  
む——

もう一回おなしやす、あつしは耳が遠いもんで。

——あいむ——

え?

「亜衣夢!!!起きなさい!!!」

「はいバツチリ目覚めました皆様おはようございます!!!」

「うるさい!!!」(亜衣夢を殴り飛ばす)

「あべし!!」

「あ！起きましたよ!!」

「・・・あれ？ここは？」

「ふん、やっと起きたようね。ずいぶんとうなされていたようだけど。」

「お、お嬢様？という事はここは。」

「そうです。紅魔館です。」

「さ、咲夜さん・・・」

「いやービックリしたのですよ。私が向かっていったら咲夜さんがあなたを抱き抱えて運んでいたのですから。」

「・・・うつわ。はつずかし。女性に抱っこされちまったよ。なに？これ？助けてくれたはいいけどなんか・・・ねえ？」

「亜衣夢・・・無いとは思うけど、まさか森に入ったりしていないわよね？」

「入ってません・・・本当です。ただ、人里でちよつと人にからまれて、遅くなってしまい急いでいたら、あの化物に襲われたのです。」

「・・・！本当に？」

「はい・・・」

「なんて言うことなの・・・」

「亜衣夢さん、あの妖怪はルーミアといい闇を操ることができる妖怪なのです。」

「や、闇を・・・ですか。」

「多分その能力を使って亜衣夢さんにしのびよったのだと思います。」

「災難だったわね。でも、あいつが人里近くまで来るなんて・・・今日は新月では無いはず。」

「まあ、いいじゃないですか咲夜さん。亜衣夢さんも無事だったのですし、これで妹様にも怒られずに済みますよ。」

「それもそうね。」

「ちよつと！私をおいてけぼりにするな!!」



「ははは・・・」

「さてと、そろそろ夕食の用意でもしますか。」

「あ、でも亜衣夢さん買い物どころでは。」

「大丈夫です、ちゃんと死守しましたので。」

「・・・あんた凄いガッツね。」

半刻後、夕食の準備が出来たので食堂へと集まる亜衣夢達。亜衣夢のハプニングにより少々時間が遅れていたため皆空腹状態であった。それにより食事が始まるとすごい勢いで食べ恥じたのであった。

「亜衣夢、ちよつといいかしら?」

「ふえ?ふあい、いいでふうよ。」(約?え?はい、いいですよ。)

「あ、やっぱり食べ終わってからでいいわ。」

ゴクン「あ、はい。」

少年飲食中……

「プツハーご馳走様でした!」

「食べ終わったようね。それじゃあ、妹様、来てください。」

来たのはレミリアよりちよつと小さいくらいの少女であった。金色の髪にレミリアと同じような帽子。そして極めつけはまるで木の枝に宝石をぶら下げたような、なんとも奇妙な羽らしきものがあった。

「この方はフランドール・スカーレット。お嬢様の妹です。」

な、妹?!マジで?!いたのか!

「あなたが亜衣夢?」

「え?はい、そうですよ。亜衣夢です。」

「ふーん、予想以上に壊れやすそう。」

今の発言で俺のカバーガラスハートが壊れかけましたよ。

「てか、なんで今なのですか?昨日でも紹介するなら良かったのでは。」

「それは・・・」(亜衣夢の耳元により)

(妹様は少々情緒不安定でして、いつ暴れるのか解らないのです。なので調子のいい今にしたのです。)

(なるほど、了解です。)

「そうだ、ねえ亜衣夢。」

「は、はい、何でしょうか、妹様?」

うわああ、慣れねえなこの言い方。

「私と、遊んでくれない?」

その言葉が発せられた瞬間、この場に緊張感が走ったことに、亜衣夢は気づけなかった。そして意味も・・・フランドールの言う「遊ぶ」の本当の意味さえも・・・

弾幕(っつこ)

「私と遊んで?」

この一言で辺りの空気は一変した。フランドールを除いた(亜衣夢も含まれる)皆が深刻そうな顔でお互いを見合っていた。流石の亜衣夢もそれに気がついた。

「……え? 何この張り詰めた空気。何なん? フラ、妹様の言ったことがおかしい事なの?」

「ねえ、いいでしょ? 私と遊んでよ?」

そう言いながらフランドールは亜衣夢の服の裾をつかみながら揺さぶる。

「……何この子まじ無邪気やん。本当になんでこんな空気になるんだ……? わからんなー」

亜衣夢がフランドールのねだりに負けてしまい、それを了承しようとしたその時。

「駄目よ。」

レミリアが鋭い口調でそう言い放った。フランドールは眉間に軽くシワを寄せて悲しげな顔をして言い返す。

「……何で? お姉様。」

「よく聞きなさい。私達は誇り高き吸血鬼、けどねアレはただの馬鹿で貧弱、愚かな人間なのよ? 私達がどんなに手加減しても、ただの人間のこいつには無理。壊れてしまうわ。」

「……………」

はいはいはい待て待て待て待て待ちなさい。何か人類全体を馬鹿にしているんだろうけど、なぜだ。俺だけを馬鹿にしているように聞こえてくる。あれ？何か目から熱いものが……………」

「お嬢様、少々よろしいですか？」

「……………何、咲夜。」

「それなら亜衣夢自体を強くしてみたらいかがでしょうか？」

「……………何をいうかと思えば、あなたもアレを殺させたいの？」

「そういう訳ではございません。亜衣夢はすでにここの使用人。ある程度の戦闘はできなくてはなりません。なのでこれを機に亜衣夢を鍛えてみたらどうですか？」

「なるほどね。」

「それに……………」

「……………ふふ、そうね、それは面白そうね。」

……………何だ？なにか寒気が……………あ、これアカンやつだ。絶対俺に何か来るよ。

「フラン、良い？亜衣夢は今のままでは雑魚なの。だからあいつを弾幕ごっこができるくらいのレベルまであげる。だからその時まで待ってくれる？」

「……………解った。私待つ。」

「ありがとう。解ってくれて。」

そうやってレミリアはフランドールのことを優しく覆いかぶさるようにして抱きしめた。

「……………いい話ですねえ。」

「ふふ、そうね。」

「確かに……」

ん？

結局妹様とやることになってるやん  
!!!!!!????

なんかかんやあり次の日の夜、紅魔館の住人はレミアアの命により  
全員外庭に集まった。

「それでは早速亜衣夢を強く、鍛えたいと思う。異論のある奴。頭を  
差し出せ。」

あ、異論したら殺されるんですね解りませんはい。

「とりあえずお前にはここのルールを知ってもらおう。咲夜。」

「かしこまりました。」

あ、咲夜さんが説明するのか。まあ予想通りだけどね。

「知ってるとは思いますが幻想郷には人間や妖怪、神霊、妖精など多種多様です。そんな中殺し合いはできず廃れていった妖怪などのために生まれた擬似的に命をかけられる、誰もが平等に戦うことのできる、『弾幕ごっこ』があります。」

「弾幕ごっこ?」

遊び、ではないよね。ごっここといったけど擬似的に命をかけるんだもの。絶対違う。

「そうです。ルールとしては『スペルカード』を用意します。」

「スペルカード?」

「スペルカードというのはまあ、自分の必殺技みたいなものです。それをカードにしてその技を出すときに宣言して使います。」

「ふんふん。」

「あ、いい忘れてましたが『弾幕』というのが基本的な攻撃手段です。ルーミアが出したあの光球のことよ。」

あれが弾幕だったのか。ほんと不思議だったよなあれ。

「その形などは使用者によって変わります。私の場合、このナイフを使います。」

そう言っただけで咲夜はどこからとも無くナイフを抜き出した。月の光を反射し、銀色がより強調されており余計に恐怖を煽るかのようだった。

「これらを相手に当てて降参させたり、行動不能状態にしたりできれば勝ち。ほかに相手の持っているスペルカードをすべて破つても勝ち。まあ、大体勝手にルールを決めたりもするのだけど、これが基本

的なルールね。」

「……だめだ、理解に苦しむ。頭の容量2KBの俺にはきつい。まじ外付けハードディスクドライブつけよう。」

「まあ、習うより慣れろよ。とにかく実戦してみましよう。」

「いやいや、待ってください。まずその弹幕？の出し方すら解らないの出来る訳」

「やれ。」

「了解です。」

「お嬢様、待ってください。ここは見本として私と美鈴で実際にやってみます。亜衣夢はそれをみてもらえるかしら？」

「わ、わかりました……」

「ラッキー！助かった！良かった！εー（ー、）フー

「……？ じゃあまずは弹幕の出し方。美鈴、お相手よろしくね。」

「よろしく願います。手加減しませんからね？」

「どうぞ。」

「うおお、なんかすごい。これは激闘の余寒……！」

「亜衣夢、よく見ておくのよ。」

「ぱ、パチュリー、様？いつも間に？」

「あら、ほんとね。パチエ、どこにいたのよ。」

「ちよつと図書館に結界を。どっかの金髪魔法使いが来ないように、ね。」

「流石ね。因みに強度は？」

「レミイが2、3回殴ったぐらいじゃ壊れないぐらいね。あと、特別な仕掛けを……」

「ほほう、それは面白そうね。見てみたいけど今はここが先。さあ、存分に戦い合いなさい。」

「わかりました！咲夜さん、行かせてもらいます!!」  
「どこからでも来なさい。返り討ちにしてあげるから。」

一方その頃、図書館では。

「ふつつつぶ、予想通り誰もいない。さあ、今日は何を借りようか  
——」

バリン!!

「痛あ！何??け、結界だと？やれやれだぜ、あいつも余計なことを  
．．．．」

そう言いながら魔理沙はどこからかミニ八卦炉を取り出した。そ  
して．．．

「行くぜ．．．．『マスタースパーク!!!!』」



場所は戻り庭。

「まずはイメージですね。己の中にある靈力を好きな形にします。この時はなるべく綺麗な形を作るようにしましょう。弹幕ごっこは美しさも大切ですから。」

すると美鈴のてかほのかに光り始めた。亜衣夢は夢でも見たかのようにだったが別にさほど驚くこともなかった。

「そして、それらが十分にイメージ出来ましたら、相手に向かって全力で………解き放つ!!」

美鈴が空を斬るようにして上段蹴りをするとその軌跡からあの時、ルーミアが撃つたのと同じもの。弹幕が出たのだ。ソレは止まることなく咲夜へ向けて放たれていった。

「よつと。」

咲夜は高速で迫りくる弹幕を多少の動作ですべてかわす。数十発撃たれた弹幕はひとつ残らず宙で消えた。

「咲夜さん、ちょっと簡単に避け過ぎじゃないですか？なんか私が弱いみたいじゃないですか。」

「知らないわよ。悔しいなら、もつと凄いのにしてくれる？」  
「言いましたね！」

「とりあえずあんな感じね。なれたらイメージしなくても呼吸するように出すことが出来るから。」

「なる程……ところで『靈力』って何ですか？」

「靈力はまあ、ようは『氣』よ。」

「氣……ですか？」

「そう。ドラゴン○ールあるでしょ？あれのようなもので靈力が多いやつほど強い。単純な話でしょ。」

「うわおここでそれ出しちゃいます？アウトですよ。セーフよりのアウトですよ。」

「で、そのドラ○ンボールでいう」

「待てえい！言っちゃってるから！○がずれて答え言ってるから！」

「氣、つまり靈力を固めて放つ。それが弾幕。更にそれらを技としたのがスペルカード。まあ、あとのことは後々話すわ。」

「じゃあ次はこちらから行かせてもらおうわね。」

「咲夜はまたどこからともなく手一杯のナイフを取り出した。美鈴はそれを見た瞬間、すぐさま臨戦態勢に戻る。その刹那、またあの光景を亜衣夢は目にするようになった。」

「咲夜は美鈴の背後に瞬間移動。そして美鈴を覆うかのように並べられた大量のナイフ。そう、これは咲夜がルーミアを倒した時と同じものだった。」

「でええええ!!早速ですか!!」

「さあ、死なないうよう頑張りなさい。」  
「この!!」

美鈴は迫りくるナイフを素手で弾き返す。背後から迫るナイフも、まるで見えているような手つきで跳ね除ける。

「亜衣夢、今咲夜は何をしたと思う?」

「いえ、検討もつきません。」

「弾幕ごっこでもう一つ必要となってくるのが『能力』よ。」

「能力?ですか?」

「そう、今咲夜は瞬間移動したように見えたでしょう。違うのよ。あれは時間を止めて美鈴の後ろに動いただけなのよ。」

「時間を・・・止める!?!」

マジか・・・まるでD○○みたいじゃねえか。時間を止める?最強じゃん。だからあんなに強いのか?

「まあ、正確に言えば『時間を操る。』が正しいんだけどね。」

うわお、どチートやん。絶対敵にだけはまわしたくねえ。死んでまう。

「ちなみに美鈴さんはどんな能力なのですか?」

「美鈴は『気を操る。』まあ、ドラゴンボール〇だと思えばいいわ。」

ゴルフA!!〇!!仕事しろ!!隠す気無しかおおい!

チツ

.....あれ?いま舌打ちが.....

「ならばいきます!スペルカード!!」

「あら、もう使うのね。じゃあ、私も……スペルカード。」

「二人とも本気ね。少し下がりましたよ。」

「は、はい。」

「パチエ、ちよつといいかしら?」

「どうしたの?」

「結界に特別な仕掛けって言ってたけど、何したのよ。」

「ああ、そのこと。それはね……」

図書館へ

「マスタースパーク!!!!」

魔理沙の八卦炉から巨大な光のレーザーが出る。その衝撃波は辺りの小物を吹き飛ばすほどだった。マスタースパークが図書館の扉にあたった瞬間。

「あ」

庭へ

「光を一回だけ反射するようにしたのよ。魔理沙、絶対マスパ撃つと思っただから。」

「なるほど。」

ドーーーーー  
!!!!!!!

激しい轟音とともに眩い光が紅魔館の屋根を貫通した。そこに人影が一瞬見えた。

「……………引つかかったわね。」

「……………そうね。」

その後魔理沙は当分図書館に近づかなくなったとか。

踏んだり蹴ったり

「スペルカード！『破山砲!!』」

「スペルカード、『ザ・ワールド』」

両者のスペルカードの激突によりあたりは激しい閃光に包まれた。しばらくしてからやっと姿が見え始めた。その頃には既に決着がついていたのが亜衣夢達には見えた。

「……私の勝ちね、美鈴。」

「ぐぬぬ……」

その光景は、咲夜が美鈴の懐までに入っておりその喉元にナイフを突き付けていた。地面には数十本のナイフが無造作に散らばっていた。きつと美鈴がはねのけたのだろうと亜衣夢は確信した。

「終わりよ。」

「……咲夜さん、何が終わりですって?」

「!?くっ……」

なんと美鈴は喉元に突きつけられたナイフをはねのけ、それで咲夜が一瞬怯んだ隙を見逃さず拳を叩き込む。咲夜はそれを能力を使い紙一重でなんとかかわす。

「まだまだ行きますよ!」

「それは残念、これでおしまいよ。」

「へ?」

咲夜は能力を使った。しかし驚くところはそこでは無い。なぜなら咲夜は時を止めていなく、移動している姿がちゃんと目視で来たから。しかしその動きは常人の出来る動きではなかった。残像が残る

ほど、超高速で動いていたのだから。

亜衣夢が見えたのもその一瞬の姿だけだった。咲夜はその速さのまま美鈴に蹴りかかったその時。

「そこまで、この勝負は咲夜の勝ちよ。流石は私の下僕。」

その言葉が聞こえた瞬間咲夜は動きを止めた。脚は美鈴の眉間に迫っただけでありあと少しでもレミリアが止めるのを遅れようものなら、美鈴はあの蹴りをまともにくらい1発KOだっただろう。

「お褒めのお言葉、ありがとうございます。」

「惜しかったわね美鈴。もう少し繰り返し出したら咲夜に一撃は当てられたのにな。」

「くうく悔しい！咲夜さん、次こそは負けませんからね！」

「出来るものなら。ね。」

「言いましたね！」

……あれ？俺ってまさかイレギュラー？んなわけ無いよね？なんかあちらで盛り上がりすぎてはいてもそんな事ないよね？

数十分後

「よし、それじゃあ本格的に亜衣夢を鍛えていきましょう。」

でた、何事も無かったかのように始めるこの行為。それはつまり、俺結局忘れられてたんだよな。……やばい、また目から海水が……

「とりあえず美鈴、あなたがやりなさい。」

「え？私ですか？」

「そう、あなたの能力なら早く上達もさせられるでしょう。」

「いや、分かりませんよ。できるかなんて」

「やれ。」

「解りました。」

あ、美鈴さん。俺と同じ扱いだ。仲間（？）。ん。？

「修行は毎日ここに来てやることね。時間は・・・夜ね。」

「ちよつと待つてください。それはここでの仕事が終わった後にここに  
来てやるということですよね？」

「もちろんよ。昼だと私が見れないじゃない。」

「それって睡眠時間を削ってやるのですか。」

「当たり前。」

・・・ 拝啓父上、母上。私の墓場はここになりそうです。

「それじゃあ早速始めましょう。善は急げってね。」

・・・え？

その夜、紅魔館周辺に男性の断末魔が度々聞こえたそうなの。



そして夜は明け、次の朝。

「・・・亜衣夢、起きなさい。五分寝坊よ。」

咲夜の呼びかけで亜衣夢は目が覚めた。どうやら昨日の出来事が相当身体に来たのだろう。さらに睡眠時間も削られているので疲れはほとんど取れていなかった。

・・・うげえ体中筋肉痛や。くっそ痛え。しかも眠い・・・あと三時間寝かせてくださいやあ。

しかし亜衣夢のそんな願いは届くはずもなく咲夜に無理矢理ひつべ剥がされた。亜衣夢はしぶしぶ仕事についた。

「今日は洗濯をしてもらえる?」

「あ、解りました。」

「やり方はわかるかしら? 脱衣所の所に洗濯機があるからそれを使ってちょうだい。そこには籠が2つぐらいあるけど洗濯物は小さい方にあるから。」

「りよーかいです。」

この時亜衣夢は気づいていなかった。これから起こる地獄のよう  
な惨劇に……

そう、洗うものは、全て

『女性』の物なのだ。

脱衣所にて

くそう、やられた！なんと事だ・・・全部女性の着衣ではないか！  
どうしろと!?

普通にやるのが一番正しいのだろう。しかし！そのままやっては  
なんか絵的にやばいよな！変態に間違われても何も言えねえよな！

ここは冷静になるんだ・・・そうだ、要は見なきやいいんだ。目  
を閉じ、心の目で見るんだ！つかむのも一瞬！洗濯機にぶち込むのも  
一瞬！これを繰り返せば・・・俺の勝ちだアアア!!

「はあ、はあ、よし、全部入れ終えたぜ・・・あとは、ボタン押して、  
完了だぜえ！」

あ  
よっしゃー終わった！あとは、終わるのを待つだけだ・・・

亜衣夢が向けた視線の先には腹を抱えて大笑いしているレミリア  
の姿があつたのだ。それを見た瞬間亜衣夢はすべてを悟った。

「・・・お嬢様・・・いつからそこに・・・」

「フツフツフツ・・・いつからって、脱衣籠の前でぐるぐるしていた  
時からよ・・・駄目だ、抑えられないwww」

「……………」

今の俺、（。 ㇿ ） ↑こんな顔

ピーピーピー

「あら、終わったじゃない。ご苦労。」

レミリアは亜衣夢を煽りに煽ってから脱衣所をでた。亜衣夢はしばらくその場から動くことはなかった。放心状態のまま変わらぬ表情、変わらぬ体制でいた。

晩食

「………… 亜衣夢さん？どうしたのですか？」

「エーナンモナイデスヨメーリンサン」

「いや、あきららかにおかしくなってるわね。片言だもの。しかもあなたがいま手にとってるのはお手拭き。パンはその横。」

「ワカツテマスヨ」

（………… よし、誰にもバレてない。）

「フラン？どうかしたの？」

「!?え?いや、なんでもないよ!」

「妹様?今なにか隠しました?」

「いや、何もないよ!あ、ご馳走さまでした!今日も美味しかったよ!」

そう言い残しフランドールはさっさと出ていった。

「……何だったのでしょうか？」  
「フランのやることよ。気にしなくていいわ。」  
「……なにか嫌な予感がします。……あれ？ワイン庫の扉が開  
いてるわね。」

そして時は過ぎ去り夜

「くっそおがああ！」  
「わああ！亜衣夢さん!?!どうしたのですか!?!」  
「うるせええいいい！こんちくしょうがああ!!」

亜衣夢は半狂半乱状態になり既に修行どころの話ではなかった。  
もう攻撃は物理のみになり弾幕を出す気配は一切なかった。

「亜衣夢、かなり荒れてますけどお嬢様、まさか何かしたりしてません  
よね……?」

「私はただ亜衣夢がなんの仕事をしていたのか見ただけよ。……  
ブツ」

「お嬢様……何かしましたね？」

「さあね〜♪それにちよつといたずらしてみただけ。」

「いたずら……はあ。」

「でもあれは異常ね。なんか暴れ過ぎじゃない？」

「お嬢様がいたずらして怒っているのでは？」  
「うくん……」

「畜生めー！汚物は消毒だー！」

「ちよつと亜衣夢さん！落ち着いてください！言語が滅茶苦茶ですよ！？」

「某が知ったことかあ！」

「亜衣夢さん、いい加減落ち着いてくださああい！」

『大鵬拳!!』

「ギャーース!!」

美鈴のスペルカードは亜衣夢の顔を確実にとらえた。そのまま美鈴は突き通し、亜衣夢は紅魔館の屋上まで飛ばされた。

「………あ。」

「美鈴。早く回収してきなさい。」

「は、はい！」

「咲夜さん大変です！亜衣夢さんが起きませーん！なにか顔も赤いし……永琳さんに見せたほうがいいですかー！」

「……なるほど。妹様、亜衣夢にワイン飲ませたわね。」

「あら、そうなの？あの時そんなことしていたのね。」

「はああ、お嬢様も妹様も……」

「咲夜さああん！どうしますかあー！」

「はいはい、ちよつと待ってー！」

……この感覚は、紫さん。そこにいるのですか？

「すいません。紫様は今はいません。」

その声は、藍さん。

「今日も随分とやられましたね。」

ははは、もう言わないで泣いちゃうから。

「……いいのですか？ここにいても。」

良いんですよ。俺は好きでやってるのですから。

「……あまり無理はなさらぬようにしてください。あ、そうです。これ、渡しておきますね。」

藍は亜衣夢に何かの小瓶を渡した。ラベルにはあきらかに危ないドクロのマークがあり亜衣夢は一瞬受け取ろうか戸惑った。

「言いたいことはわかります。ですが安心してください。のんでも死にはしません。逆に今のあなたには必要なものです。」

「そうなのですか？」

「はい。」

「……まあ、信じないわけにもいきませんので、いただきます。」  
「それでは、頑張つて下さい。これから何が起きようとも、帰りたいな  
と言わないでくださいね。」

………ああ、ここか。

亜衣夢が目を覚ましたのは分厚いカーテンに閉じ込められ、昼か夜  
かもわからない紅魔館の自室だった。亜衣夢は現状報告と思いい体を  
起こそうとした瞬間。

「………気持ち悪う！」

頭の中を直接殴られているかのような頭痛、内臓をえぐり返された  
かのような気分の悪さ。さらにめまいと体中（主に頬）の痛み。これ  
らにより亜衣夢は起き上がることができなかつた。

「マジかよ………昨日は何があつ………気持ち悪う！」

亜衣夢が口を抑えようと手を出すといつの間にか夢でもらったあ  
の小瓶がにぎられていた。



「……今は藁にでもすがりたいところだしな、飲むか。」

亜衣夢は心に決めてその怪しげな小瓶から錠剤を取り出して飲み込んだ。すると変化はすぐに起きた。先程までの症状が全て消えたのだ。あまりにも上手く行き過ぎたので少し不安に思っていたが、特に気にしないことにした。

「あ、そうだ。とりあえず咲夜さんに安否を言わないとな。」

そう言って亜衣夢は部屋をでた。咲夜から昨日の出来事の全てを聞いて死にたくなったのは言うまでもない事だった。

## 荒修行

月日は流れて行き亜衣夢が紅魔館に入って二十日が経った。寝る前も惜しんで（強制）弾幕を出す練習を美鈴としていたが、あまり進歩が無く頭を悩ませていた。

亜衣夢は負けじと頭の中でイメージをしてやるも良い結果はなかなか出ずかなり気がまいつていた。

レミリアもその進歩の無さにイラつきを覚え始めてきて亜衣夢は焦るばかりだった。

そして、その晩。ついにレミリアが我慢の限界をこえ、声を張り上げて強く言い放った。

「亜衣夢！」

「ふあい！」

「一体いつになったら出せるようになるのよ！いい加減にしなさい！」

「そ、そんなこと言われましても……」

「私は永い時間待つのが好きだが、刹那のような時を待つのは嫌いだ！前にも言っただろう!！」

「そ、そうですが……」

「いい？今日の練習で弾幕の欠片も出せなかったらお前の血を一滴残らず絞りとってやるからね！覚悟しなさい！」

「は、はいいいいい！」

やべえ、がちでやべえ。死ぬ。今日が俺の命日だ。出せる訳がねえ。今までやってきたけど何も起きなかった。できるわけがないんだ。もう駄目だ、お終いだあ。

……いや、諦める訳にはいかない、諦めたら、駄目だ！安○先生だって言ってたじゃないか！《諦めたらそこで試合終了です

よ《ってな!

良いじゃねえか、逆境結構! やってやるよ……やってらんよ!

「早く食え。」

「はい。」

そして、運命の練習が始まった。もし、今日の練習で亜衣夢が弾幕を出せなければ、ここで人生に幕を降ろすことになる。それはなんとか阻止しようと亜衣夢は全力で挑んだ。

「~~~~~!」

「頑張ってください! 良い所まで来てますよ! あまり力まず! 柔らかいイメージで!」

「~~~~~!」

「後少しです!」

「………ぷはあ!」

「ああ……駄目でしたか。」

「うう、申し訳ないです。自分が不甲斐ないばかりに……」

「そんなことないですよ! 亜衣夢さんは十分頑張っていますよ! ですが、何かが足りない気がするんですよ?」

「足りない……?」

「そうなんですよ。私にもよくわからないのですが。」  
「そんなぁ……」

ぐぬぬ、やばいぞ、このまま時間が過ぎれば、俺の命日になる！それだけは阻止しなくてわ……しかしどうする？手も足も出ないこの現状。

詰んだ／＼(´o´)／

「足りないもの、ね。」

遠くで亜衣夢と美鈴の修行を観察していたレミリアと咲夜。その会話を聞いたレミリアは今まで険しい顔で一言も話さなかったが、今いきなり口を開いたのだ。

「いかがなされましたかお嬢様。」

「いい方法を思いついたのよ。」

「？ それは一体——あ！お嬢様！」

レミリアは咲夜の言葉に聞く耳を持たずに亜衣夢の元へ向かっていった。咲夜は小さく溜息をつき、その場に留まった。

「うくん、どうしましょうか。」

「中国、退きなさい。」

「へ？ わわっ！お嬢様？」

レミリアは亜衣夢の前にいた美鈴を無理矢理押し退け亜衣夢の前に立った。その顔は至って冷酷。氷のように冷たい視線が亜衣夢に突き刺さる。

「ついてきなさい。」

「え？」

予想もしなかった発言に亜衣夢は一瞬理解が遅れた。殺されると思いその恐怖で顔が引きつり言葉も出せなかったが、その一言で我を戻した。

だが、結末は変わらないであろう。そう思うとまた、恐怖で声が出せなくなってしまうた。

「動けないのかしら？　じゃあ、無理矢理連れて行くわ。」  
「!!」

亜衣夢は服を掴まれたと思う暇もなくレミリアに連れ去られた。その速さは尋常ではなく瞬間で闇夜の中へと消えていった。

美鈴は唾然として思考がしばらく停止しており、その後気づき追おうとするも無駄だと解つたのですぐに歩みを止めた。

「亜衣夢さん……」

美鈴はとても心配な表情で亜衣夢の消えた軌跡を目で辿っていつ

た。

ぎやああああ！ 速い速い速い！！

亜衣夢は凄まじき速さでレミアに連れ去られていた。あまりの速さに亜衣夢はまともに呼吸もできずにいた。

速い速い速い速い速い速い速い速いはや——

「着地。」

あべしい！ ……気持ち悪う …… (デジャヴ)

さらにレミリアの急ブレーキにより亜衣夢は目がまわり無事でいた事が逆に不思議に思えてくるほどだった。

「さて、あなたには何故ここに連れてこられたわからないでしょう。とりあえず周りを見てみなさい。」

「ま、周り ……!? こ、ここは ……」

「そう、ここはあなたがルーミアに襲われるきつかけとなった人里近くの森よ。」

なんてこった、こんなところに拉致されるだなんて。 ……でも、なんでここなんだ？ そもそも、なんで拉致られたんすか俺？

「私は思ったのよ。このままのやり方ではこれ以上の進歩は見込めないぞ。」

「では、どうすればいいのですか ……」

「だから、ここ来きた。」

「 ……はい? 」

「ここは知ってる通りルーミアから野良妖怪が大勢いるわ。そいつらはもちろん人喰い。あなたのようになんの力もない奴が来たら、間違い無く死ぬでしょう。」

じゃあなんで連れてきたんだよ

——— なんて言えたらどんなにスッキリすることか ……

「では、俺に死ぬと言うのですか? 」

「それはあなた次第。ここで生き残ることができれば色々変わるでしょう。安心しなさい。生きていれば助け出してあげるわ。それじゃあ。」

「ま、待ってください——」

レミリアは亜衣夢の声を遮るように闇夜へ飛び立っていった。月明かりすら入ってこないうえ人喰い妖怪の住処のこの森に無力な人間一人残されてしまった。

一人いなくなっただけ。それだけで亜衣夢の孤独と恐怖感は体の奥から湧き上がってきた。亜衣夢は急いでここから出ようとするが、飛んで来たのでどこから出ればいいのかわからない。

「マジかよ……くそっ！どうしろってんだよここで……」

いきなりの事で亜衣夢は混乱しており苛立ちも覚えた。何故ここなのか？もつといい場があるのではないのか？それに、何故美鈴の教授では駄目なのか。様々な疑問だけ思いつくも、答えは一向に見つからない。

「とにかく……ここから出ないと。」

亜衣夢が一步踏み出すと、ある音が鳴ると共に体中が震えた。何故か。その答えは亜衣夢の足元にあった。

「……！うう……!?」

亜衣夢の足元にあったのは何か棒みたいなもの。だが、棒は棒でも木の枝などではない。ようやく目が暗闇に慣れよく見るとそれは湾曲しており、苔が生えており緑っぱかったがほのかに白い。これらの条件により、何かをすぐに理解できた。

「ほ、骨……！」



そしてすぐに吐き気がやってきた。亜衣夢はソレを出すまいと必死に押さえ込む。

なんとか吐き気が収まったが、それでも良い気分ではない。恐怖感はどうどん加速していき亜衣夢の膝は震え上がりまともな状態では無かった。

くそっ！動け！この脚！！

バアン！！

亜衣夢は震え上がっていた自分の脚を思い切り叩き痛みで起こした。それでなんとか動くようにはなったが、やはりまだ力が入りにくい。

そんな中、不幸はまだ続いていた

ガサツ

「!?」

亜衣夢はすぐさまその音のした方向をむいた。そして確信した。何かがそこにいると。

こんな時に出てくるのはもう決まっている。

「ゲ、ゲゲゲ・・・人・・・間・・・」

「・・・！ よ、妖怪!?!」

出てきたのは獣だった。もちろんタダの獣ではない。見た目は犬のようだが大きさが仔牛の一回り大きいぐらい。だがかなり痩せこけていた。目は真っ赤で燃えているかのよう。数十メートルは離れているのに鼻に突き刺さるような悪臭。さらに人語をしゃべる。

「ググ．．．ゲ．．久シ、ブリノ．．．人間!!!」

その獣は有無言わず亜衣夢に飛びかかる。暗闇でも見える赤い目。黄色で鋭利な爪。亜衣夢はあまりの恐怖により脚に力が入らず尻もちをついてしまった。しかしそれは今では好機だった。

獣は首を狙っていたのでいきなり尻もちをついた亜衣夢の頭上を通り抜け後ろにあった木に激突した。

バキバキ！メシイ！

あの飛びかかりで高さ十メートルあるであろう大木が簡単にへし折られた。その残骸から、また獣は起き上がりこちらを向く。

「ひ、ひい．．．」

「逃ゲルジャネエヨ、俺ハ腹ガ減ツテンダ。オトナシク喰ワレロ．．．！」



「……こんなものでいいかしらね。」

レミアはまだ森の中にいたのだ。何をしていたかというのは足元を見たらすぐに解る。

大量の妖怪が倒れているのだ。全員血まみれで起き上がることは無かったが、かろうじて生きていた。

「ぐっ……紅魔館の主が俺たちになんのようにだつてんだ……」

「ちよつと家の使用人を強くしようとしてね、そこであんたのこの雑魚犬借りたのよ。」

「まるで意味がわからんぞ」

「あんたらじゃ強すぎるのよ。だから一番弱くて頭も無い馬鹿犬を連れ出したのよ。」

「……理解できん。きつと今見ているであろう皆様も理解できていな

「いはずだ。そうだろう!?!」

「誰に言ってるんよの。」

「気にするな。だが、非常にまずい。」

「何がよ。」

「この中にボスがいない。つまりその使用人とやらのもとに行ってるはずだ。ボスは人肉に目がないからな。今つころ死んでるんじゃない——」

ザクツ

「うぎやあああ! テメエ! 何しやがる!」

「それを先にいえ! くっ、計算ミスね。」

レミリアは背中にある巨大な翼を広げて一瞬で飛び去った。

「……何がしたかったん……だ……ガクツ」



亜衣夢は逃げようと後ずさる。しかし獣はゆつくりと距離を詰める。その距離はだんだんと縮まる。亜衣夢が数メートル後退したとき、手元に何かがあるのがわかった。

これは、棍棒？なぜこんなところに……だけど、今は好都合！

亜衣夢は棍棒を強く握りしめる。そうすると不思議と勇気が湧いてきた。亜衣夢は距離を見計らい、タイミングを伺う。

「ナンダア？モウ鬼ゴトハ終イカ？ジャア、死ネエ！」

「死ぬのは、てめえの方だあ！」

バキイ!!!

周囲に鈍い音が響き渡る。それもそのはず。石ぐらい硬い棍棒で力一杯殴ったのだから。その衝撃が亜衣夢の手にまで伝わる。

「……テメエ、痛エジャネエカヨ！」

なんと獣はほぼ無傷に近かった。亜衣夢はもう一度殴ろうとしたが違和感があった。

「……！」

あろうことかの一番太いところが砕け散っていたのだ。一メートル

ルはあつたはずの棍棒も、今では三十センチぐらいになってしまつた。

「ドウヤラモウ万策尽キタヨウダナ。今度こそ死ネエ！」

「万策尽きた？何言つてんだ。俺はこれを待つてたんだよ！」

グチャ

「グルオオアアアガアアアオ!!」

亜衣夢は割れた棍棒の先端部分を獣の目目掛けて突き刺したのだ。効果は抜群。簡単に突き刺さりニチャニチャと汚い音がした。

「最初に殴つたのはお前を倒す為じゃねえ、こうやって刺せるように尖らすためだ！お前が硬いのはさっきのでわかった。だがな、目とかそういう所まで硬いやつはいねえ！さっさと、死にやがれ！」

亜衣夢は棍棒から手を離し突き刺さっている状態の棍棒目掛けて蹴りを放つた。さらに深く刺さり獣は倒れた。微妙に胸が上下していたのでまだ死んではいなかった。

「よし、逃げよう！」

妖怪を倒したことにより先程までの恐怖感は消え去り、代わりに違う感情がでてきた。

しかしそれも一瞬の出来事だった。

ドオオン!!

大きな地鳴りがしたかと思うと亜衣夢の胸元に何か飛んできた。それは暗紅に光輝く弾幕だった。

ソレは亜衣夢に着弾すると同時に弾け飛ぶ。亜衣夢は派手に吹っ飛ばされた。

「……………!?!」

そしてそのまま獣が倒した大木の所まで飛ばされ激突する。息が出来なくなる。さらに体中から鈍い音が響いてきた。

骨が折れたのだ。それも一本ではなく数本も。

痛みと呼吸困難で意識が朦朧とする。そんななか声が聞こえた。酷くくぐもってきける重低音の声。

「何でたったってこんなところに餌がいるんだ?…まあいいがな、俺の今日の食料だ!」

そして亜衣夢は視界が真っ暗になった。薄れゆく意識の中分かったのは、巨大な何かに殴られこうなった。そう思った時、亜衣夢の意識は張られた糸を切られたかのようにブツリと途切れてしまった。

## 能力の開花

「……何処だここは……暗いしジメジメしてるな……それに……なんか頭に血が登ってきた——？」

「……………」

亜衣夢は目を覚ました。そこは先程妖怪と戦っていた森とは違い周りは岩肌でドーム状になっていた。そう、どこかもわからない洞窟に亜衣夢はいたのだ。

さらにもうひとつ亜衣夢は気付く。手足首に何か違和感があるうえ見動き取れないのだ。まだはつきり覚めていない目でよく見ると……

「な……何じゃあこりやあああ!?!」

なんと両方手足首が縄で縛られて棒にくくりつけられてぶら下がっていた。その姿はまるで、豚の丸焼きのようだった。

「ええちよつとマジで勘弁してください誰ですかこんなことするのマジ許しませんよとりあえず誰か助けてくださいお願いします何もしませんがど鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼」

「うるせえええ!!!」

「キエエエ!!」

「たくつ、いきなり目、覚まして喋ったかと思えば……」

「……………!」

亜衣夢の目の前にいたのは身長4、5メートルもあるような巨人だった。恐ろしく肥大した太鼓腹にドス黒い緑のような肌。獣を彷彿させる鋭利な牙。そして何かが腐ったかのような臭い。これらの特徴で亜衣夢はアレが何なのかを理解した。



「お前は、オーガか・・・？」

「？ お前俺の種族を当てるたあなかなかな。人間のくせしてやるな。・・・じゃあ俺が今から何をするのか、もう理解できたな？」  
「・・・！」

亜衣夢の顔からは一気に血の気が引いた。(決して逆さまになっているからとかそういうのは関係ない)何故なら亜衣夢の目の前にいるオーガの主食は、人間だからだ。

オーガが亜衣夢に近寄るとさらに腐臭は強まり亜衣夢は思わず顔をそむける。すると、下の方で何かカチカチと石と石がぶつかる音がした。まさかと思いい下を見ると予想通りの結果になっていた。

火をつけられていたのだ。あの音は火打ち石を打っていた音だったのだ。

「最近俺気づいたんだよ。焼いて食ったほうが美味いってな。」

「ギヤアアア!!何してんだよ!!やめろ!やめろ!あつつうう!!ちくしょう!!」

亜衣夢は熱さから逃れようと体を横に揺らしている。しかし火の勢いはどんどん増している。亜衣夢の体に燃え移るのも時間の問題だろう。

「そうそう、その苦しみもがく様だよ。俺の一番の好物は。その生にしがみついている様。ああ、満たされるぜえ・・・」

このくそ変態が・・・だがこのままではまずい。なによりあつつい!!マジで熱い!HELP!!

「ああ駄目だ、もう、我慢できねえ……」  
「え？」

オーガはダラダラと大量の唾液を口から漏らしながらそう言った。するとオーガは方向を亜衣夢とは真逆に変えて去っていった。

そして一分もしないうちに戻ってきた。手には先程まで無かった人間大はあるであろう巨大で所々赤黒に染まった出刃包丁を持ってきたのだ。

「!?」

「グエへへ……もう待ちきれねえよ、焼けるまで待てるかよ。飯が目の前にあるってんによお!!」

オーガはその手にある巨大な出刃包丁を振り上げた。その瞬間亜衣夢はあの時、ルーミアにあつた時を思い出しした。その時もこのように殺されかけていた。そう思い覚悟した。

ああ、俺は死ぬのか。あの時たすかったと思つたのにもうこれかよ。死因は過労死じゃなくて食死(?)かよ。なんかもう背中が熱くねえわ。ドーパミンとかアドレナリンあたりでも出てんのか?ごめん嘘ついたためっちゃ熱い。

……いやまて、ルーミアの時死ぬかと思つたら咲夜さんがぎりぎりのところで助けに来てくれた。ということはもしかして――

ガタツ

「!? 誰だあ!!」

「……グルルルル」

「……なんだ、ただの狼か。」

なんで狼なの!?!そこは誰かがきて助けてくれんじゃないのかよ!!  
ちくしょうめ!やっぱり奇跡なんてなかったのか……

「どこから来たかは知らねえが、お前もついでだ。死ねえ!」

オーガは目標を狼に変えて再度出刃包丁を無慈悲に振り下ろした。  
しかし狼は口元をかすかにゆるめた。

「誰に向かって言ってるのよ。」  
『!?!』

狼は突如として姿を消した。いや、消えたように見えたのだ。狼は  
目にも止まらない速さでオーガの持つ出刃包丁を粉碎したのだ。

勢いはまだ止まらない。その狼は急カーブをして今度はオーガの  
肥えた腹に目掛けて突進をした。オーガはたまらずバツクステップ  
をしぎりぎりでかわす。

「てめえ、ただの狼じゃねえな!誰だ!?!」

「……あら、まだ解らないのかしら。これだからでかいだけの奴は  
嫌いなものよ。」

「ああ!?!」

あの声、そしてあの微妙な上から目線の言い方。まさか……ま  
さか!?!

「亜衣夢、いつまで呆けた顔をしてるのよ。」  
「やっぱり、あなたは……!」

すると狼は獣の姿から紅い霧に姿を変えたのだ。そしてそこから  
霧が集まっていき、たちまち人の形になった。

その姿は十代に満たないほどの背丈。その背丈を越すほど巨大な翼。貴族のような上品さを感じられる服装。そしてアノ威圧感。これらで亜衣夢は確信した。

「お、お嬢様……」

「こいつが、あのScarlet・Devil（紅い悪魔）か……」  
「ふうん、意外と知られているのね。」

「何だ……その能力は！」

「私の種族は知ってるでしょ？吸血鬼よ？体を霧や狼、蝙蝠に変えることができるのよ。ま、ほんとは使いたくなかったのだけどそいつを助けるためだからね。」

「……助けに来た？前に調子に乗って博麗の巫女にボコボコにされた間抜けが何言ってるやがんだ。」

「ほう、随分と身の程をわきまえない発言をするのね。」

「お前こそ、調子のんなよ。俺の手製出刃包丁を壊したぐらいでな。」  
「あら、負け惜しみ？私からしたらちよつと肩が当たっただけなのに。ま、使い手がこんなんじや武器もその程度よね。」

「——！ぶっ殺す!!」

「!? お嬢様!!」

オーガはあの巨体をものともしない俊敏な動きでレミリアに急接近していった。そしてそれにふさわしい大きさの拳で殴りかかった。

レミリアはそれを軽い動きでかわす。オーガの拳はそのまま地面に激突した。その威力は絶大で直径2メートルのクレーターができるほどだった。

「うまくかわしたな。だが、これならどうだ!？」

今度はそのぶつけた拳を振り上げたアッパーの形にして攻撃したが、これもまたレミリアには届かず横にかわされてしまう。それで

もオーガは攻撃の手を止めることはなかった。裏拳でのなぎ払いからの殴りかかり。時にはあたりには転がり落ちていた石を投げるもレミリアにはかすりすらしなかった。

「ぜえ、ぜえ、なぜだ・・・なぜ当たらんのだ！」

「まだわからないの？私とあんたじゃ妖力の差が火を見るよりもあきらかなのよ。そもそもそんなあくびが出ちゃうようなパンチ、誰が当たるのよ。」

「クソがあ!!」

オーガは怒りに任せて全速力での突進をした。だが、結果は先程と変わらずただかわされたどころか勢いを止めることができず壁に激突してしまった。その衝撃は凄まじいもので洞窟全体が揺れ天井からは埃などが降ってきた。

オーガは起き上がろうとするが、当たった壁が崩れ落ちてきてオーガに覆いかぶさる。その衝撃に勝てることができず沈黙してしまっ

た。  
「あら？ もう終わりなのかしら？最後が自滅とは・・・くだらないわね。」

「お、お嬢様・・・」

「あ・亜衣夢。」

ん？ 何だ・・・なにか違うぞ？いつものお嬢様のオーラじゃない・・・みたいな感じがする。

「ぶ、無事だったのね？動けるわね？それじゃあさっさと帰るわよ。」

・・・んん？ いつも通り、じゃないよな？やっぱり何か変だぞ？  
・・・まあいいか。

ガタツ ガララララ!!

レミリアが急いだ様子で洞窟を出ようとしていたので亜衣夢はそれを追った。しかしレミリアが洞窟の入り口にいて亜衣夢が出ようとした瞬間、後ろの方から何かが崩れる音がした。

亜衣夢がその音に気づき後ろを振り向いた瞬間。目の前にいたのは先程まで瓦礫の下で果っていたオーガであった。

「なっ、お前。まだ動け——」

まさに鬼の表情。怒りに満ち溢れた顔をしているオーガは妖力が体中から滲み出るぐらいのオーラを放ちなが殴りかかってきたのだ。

しかし、標的は亜衣夢ではなかった。レミリアだったのだ。オーガは亜衣夢など眼中に無かったのだろう。そのまま亜衣夢を抜かし背中を見せ油断しきっているレミリアに攻撃を仕掛けたのだった。

「お、お嬢様!!!」

「えっ？」

レミリアが振り向いた時にはすでにオーガとの距離は2、3メートルとなっていた。とっさに避けようとするとオーガはいつの間にか持っていた瓦礫の破片をレミリアに向けて投げたのだ。

それはオーガより早くレミリアとの距離を詰めた。



クソが・・・クソがあ・・・

大量の瓦礫に埋め尽くされながらオーガは何回もそう言っていた。それもそのはず、今までここらの妖怪のボスだったが幼き吸血鬼にも足もでずに完敗したのだから。プライドというプライドがズタズタにされ動くことすらできなかつた。

クソが、俺はオーガ最強だ。周りにいたオーガは俺が幼少のとき全員喰らい尽くした。そして五十年でこのボスになった！

なのに、なぜ俺があんな小娘に……殺す、絶対殺す!!!

その時オーガは何かを目覚めた。体の奥底から黒い何かが溢れ出てきて動かすことができなかつた手足、いや体中から力が沸き上がるようだった。

黒い何か。それは怨み、憤怒などといった感情だった。それらはオーガに大きな力を与えた。

体につけていた大量の瓦礫をあたりに撒き散らしながら一心不乱に亜衣夢達に向かつていった。目的はレミアに自分が受けたのと同じような屈辱を味わせること。

「まずは、てめえからだあああ!!」

「危な——」

亜衣夢が無駄だとも解りながらオーガを追いかけがあるが、あろうことかオーガの威圧にやられて足がすくんだうえ、振りまいた石に足を引っ掛けてしまい倒れ込んでしまったのだ。

まじか！ この状況ですか!? 嘘だ……このままじゃお嬢様が！ くそ！ ごめんなさい、助けることが出来ませんでした。

亜衣夢はすぐ手元にあつた石を自分への怒り、そして申し訳無さを



こめて強く握りしめた。

「しねええああ!!!」

オーガはレミリアの華奢な体に向かって全力で拳を放つ。その衝撃波はレミリアを超えて洞窟の岩壁を破壊した。亜衣夢はその悲惨な光景から目を背けた。

そしてあたりにしばらく静寂が続いた。亜衣夢が意を決して閉じていた目を開けると、そこには予想外のことが起きていた。

「……………」

「……………」

「……………え?」

オーガの拳はなんとレミリアの目の前で止まっていたのだ。そこにいた誰もが唖然とした。更に驚くことにオーガが少しずつ後退していたのだ。だがそれはオーガ自身の意思ではない。

オーガがソレに抗おうと一歩足を出そうとするとその足が地面と接する前にまた後ろへと戻されたのだ。

「な、何だあこりやあ? 前に、行けねえ……?」

「……フツ、どうやらそこにいる人間の仕業らしいわよ？デカ物。」  
「ああ!? あいつがか!？」

そう言つてオーガは顔だけを亜衣夢の方へ向けた。亜衣夢は目があつてしまいまた恐怖を覚える。

「これを、俺が?」

「てめえ、とりあえずどうかしろよ……この岩が、俺の腹にめりこんでんだよ!」

「い、岩?」

よく見ると50センチ近くある岩が見事に膨れ上がったオーガの腹にめり込んでいたのだ。コノ岩がオーガの動きを止めたうえ後退される原因だったのだ。

オーガの足はすでに限界に近くちよつとの刺激を与えればすぐ決壊しそうなくらいだった。

「それが、亜衣夢の能力よ。」

「これが、奴の……!？」

「そうよ。ま、お前にはもう関係のない話ね。亜衣夢、こいつの足を蹴つてやんなさい。」

「え?」

「!? 待て待て待て! 今はやばい! 頼む! 見逃してくれ!」

「亜衣夢。」

「悪く思わないでね?」

「やめ——」

三紗流奥義——

『膝カックン』

カクン

「あ……」

オーガの足に力が抜けた瞬間物凄い速さで飛んでいった。向かう先はオーガがまだオーガが沈黙する前、突進していた所であった。

まずオーガが先に壁に衝突するとそれに覆いかぶさるように飛び散っていた瓦礫片が集まってきたのだ。あまりの圧力によりまた奴は沈黙した。

「…………ふう、終わったわね。」

「……………」

「? 亜衣夢?」

「……………」

「起きなさい。」

ゲシッ!

「ゴフツ! い、痛いです……」

「さっさと起きなさい。さあ、帰るわよ。」

「こ、今度こそ帰れますよね?」

「ええ、勿論よ。さっさと帰って咲夜の料理を食べに行くわよ。」

そう言ってレミリアは意気揚々と洞窟をでた。亜衣夢もそれに少し遅れて追いかける。洞窟を出るとそこは見覚えのある森へと出た。

夜では月の光すら入ってこないほどの密度で木の葉が集まっていたが今は薄っすらと日差しが入ってきていた。それを見て夜が明けたと思い亜衣夢は進むがレミリアは立ち止まってしまった。

不審に思い亜衣夢はレミリアに訳を聞いた。

「お嬢様、どうなされたのですか？早く行きましょうよ。」

「……行けない。」

「へ？」

「日光が出てる……」

「あ……」

その言葉で全てを察した。レミアアの種族、それは吸血鬼である。代表的な弱点として銀や水、そして日光。ここで思い出す。レミアアが日中外に出るときは必ず傘を指していたことに。

「……亜衣夢。」

「は、はい？」

「あなた、傘になりなさい。」

「……」

「んな無茶な!!!」

亜衣夢の悲痛な叫びは虚しく森の木々によってかき消されてしまった。

## 七色の魔法使い現る

静かな食堂に紅茶の注がれる音が響く。それと同時に高級感溢れる香りがあったりに漂ってきた。咲夜はその場にいる四人分の紅茶を入れ、皆に配る。

「どうぞ。今日の紅茶はいつもより良い物を使いました。」

「うおお・・・めっちゃ美味そう・・・」

「本当、流石は咲夜ね。」

「・・・」

「・・・咲夜。」

「はい、何でしょうか？ お嬢様。」

皆が褒めているなか明らかに不機嫌な顔をしているのが二名。そのうちの一人レミリアが咲夜を睨みながら質問した。

亜衣夢はなぜそんなにも不機嫌なのかは理解できなかった。何が不満なのだろうか。と思っていた。

「あなたに問うわ。今日は何をイレた？」

「・・・は？ 『何を入れた？』何を言っているんだ？」

亜衣夢はその発言があまりにもおかしく咲夜の方をチラツと見た。するとどういふことか咲夜は口笛を吹きつつレミリアから目を背け明後日の方を見ている。

これを見た亜衣夢は確信した。何か入れたな、と。

「え？ なんの事ですか？ 私わかりませーん。」

どうやらあくまでシラを切るようだ。レミリアの紅茶をみると明

らかに色が違った。亜衣夢のは透き通った赤茶いろだが、レミリアのはなんと真つ青。

亜衣夢はあまりの咲夜の嘘と隠しかたの下手さに少し失笑した。とりあえずこの状況を楽しもうと紅茶を口にする。

するとレミリアは少しため息をつき、咲夜の方を再度見た。

「そう、じゃあ咲夜。」

「はい?。」

亜衣夢がレミリアの方をよく見ると違和感があった。それもそのはず。左肘から先が無いのだから。それに気が付き今度は咲夜の方に目を向けると。悲劇は起きた。

「ソコに隠しているペンとスケッチブックと怪しい袋は何!!」

「きやああああ!!?」

「ぶふうう!!」

「ちよ!汚い!」

「.....」

レミリアの分身のコウモリが咲夜のスカートを後ろから思い切りめくりあげたのだ。咲夜はたまらず前の方を抑えるが後ろはどうにもならなかった。

亜衣夢はその光景を目の当たりに口に含んでいた紅茶を盛大に吹き出しその被害は隣にいたものにも及んだ。

するとバサバサッとレミリアの言った通りペンとスケッチブックと怪しい袋が咲夜のスカートから落ちてきた。

「.....さて、なにか言うことは?。」

「.....お嬢様。」

「なに?。」

「逃げるが・・・勝ちです!!」

「あ! くら待っ——」

レミリアが立ち上がった時には既に咲夜は姿を消していた。咲夜がいたであろう場所には数枚のトランプが残されていた。

レミリアはそれを見てこめかみのあたりに青筋を立ててトランプを自分の羽で八つ裂きにした。

「あの駄メイドめ・・・」

「・・・(啞然)」

「あはは、いつも通りねあのメイドは。」

「・・・」

「ていうかあなた、なんでそんな不機嫌なのよ。」

レミリアは今の今までずっとしかめっ面をしていたパチュリーに問いかけた。パチュリーはいかにも不機嫌な顔をしてやっとな口を開いた。

「・・・なんで。ここにアリスがいるのよ。」

「へっ? 私?」

「そうよあなたよ、あ・な・た。レミィと亜衣夢がやっとな帰ってきたかと思えばなんであなたまでついてきてるのよ。」

「何でってそれは——」

時は戻り、亜衣夢とレミアアがオーガを倒して帰ろうとした時既に朝で日差しが木々の隙間から漏れておりレミアアは洞窟から出ることはできず亜衣夢に日傘の代わりとなれという始末であった。さてどうしたものかと悩んでいるとき森の奥の方から誰かがやって来た。

「……あら？ レミアアじゃない。どうしたのよ。それに……誰？」

「いや、それこっちのセリフ。あなたこそ誰？お嬢様の知り合いっぽいけど。」

シャンハイ

「うおおお！ 何この小さいの！ てか喋った!？」

「この子は『上海人形』私の人形よ。」

「亜衣夢、安心しなさい。あれは悪いやつではないから。」

「悪の塊みたいなのにそんなこと言われたくないわよ……まあいいわ。私の名前は『アリス・マーガトロイド』一応魔法使いよ。」

「あ、自分は三紗亜衣夢です。紅魔館の使用者です。」



「レミリア、あんたもモノ好きね。」

「ふふ、そうかしら？」

「そうよ。ってかどうしたのよここで。」

「そう、それよ。実は・・・」

よ・・・少女説明中

『スペルカード』

ピチユーン

「・・・なるほどね。そういう事なのね。それならちよつと待ってなさい。家から持ってくるから。」

「いや、今のは一体な」

「あら、助かるわ。そうよ、あなた館に来なさい。少しの間お茶にしましょう。」

「あら、いいわね。ありがたくちようだいするわね。」

—・・・(ω・ω・)

「……と、いう訳で私はここにいるのよ。」

今思えばすごく大変な思いをした。そう亜衣夢は思いつつ紅茶の飲み直ししていた。ルーミアに引き続きオーガ。連続で人喰い妖怪に会い対峙し生き残った。こんな体験は前の世界ではまず体験できないだろう。

それにアリスに会わなければ夜になるまでずっとあの洞窟の中か己が傘になるか。亜衣夢は心の中でアリスに合掌した。

パチュリーはその話を聞いて少し表情をゆるめた。疑いは晴れたが全部という訳ではないのだろう。だがある程度の緊張は解けたようだった。

「ふーん、あの白黒みたいに本を盗みに来たのかと。アレはちゃっかりしてるから。」

パチュリーがそう言うとアリスはムツとした顔をしてそちらの方へ向けた。

「しないわよ……私だってあいつの被害者なのよ?」

「ああ、そうだったわね。お互い大変ね。」

「今度にとりに頼んでトラップでも作って貰おうかしら。」

「それがいいわ。」

『フフフフフフ』

「ここ、恐れ……何この人達？いや、魔法使いか。どっちでもいい、とりあえず恐い。」

「そうよ。みんな聞いて。」

今まで黙り込んでいたれが突然声を張り上げていった。皆の視線はたちまち声の方へ向かう。レミリアは何を言いたいのか誇ったような顔をしていた。

「昨日（実際には今日）は色々ありすぎて忘れていたけど、よく聞きなさい。遂に、亜衣夢の能力が開花したのよ！」

その発言でみな驚きを隠せなかった。亜衣夢自身もそれを忘れていて今思い出した。あたりがざわめく。視線は亜衣夢に集まった。

「凄いいじゃない亜衣夢。元はただの人間なのに能力を發揮するだなんて。」

「いやあ、俺も驚きでしたよ。」

「で？ 名前はとうするの？ というかどんな能力？」

「うっ……」

アリスの質問攻めに亜衣夢は一步引く。そもそも亜衣夢はあの時何が起きたのかいまだに理解できていないのだ。記憶もオーガによる恐怖により曖昧。アリスがグイグイ来るたび亜衣夢は後ろに引いていく。

そして壁際まで追い詰められてしまう。

「アリス、そいつはオーガに怯えて何も覚えていない。けど代わりに私が覚えているわ。」

「そうなの？ それならごめんなさいね。」

アリスは少々申し訳無さそうな顔で亜衣夢を見た。亜衣夢も同じような顔をして謎のお辞儀をした。アリスはレミリアの方をみてまた問いかけた。

「それでどんな能力なの？」

「ふふっ、そいつの能力は。」

「……」

あたりに謎の緊迫感が走る。亜衣夢は生唾の飲み込み心して聞いた。アリスは興味津々にレミリアを、パチュリーは紅茶を飲みつつ横目で見ている。

「今はそいつ能力を『モノを回復させる能力』とでも言っておきましょう。」

「モノを回復させる？」

「そう、亜衣夢は壊れたモノを元の状態へ回復させることが出来る。例えば……そうね、ここに亜衣夢のお気に入り（笑）Tシャツがあるでしょ？それを、破きます。」

そう言うとレミリアは亜衣夢のTシャツを無慈悲に破り捨てたのだ。それを見た亜衣夢は目を大きく見開き盛大に叫んだ。

「ちよっと何しているのですかアア!!」

「さあ！ 直しなさいー！」

レミリアはこれでもかと酷い仕打ちをしてきた。亜衣夢はやけく

そになってTシャツを拾いに走っていった。目の前には無惨にも破り捨てられたモノ。一心不乱にそれらを掴む。

「ち、ちくしよおああ！ 元、元、戻れ!!」

亜衣夢の声は虚しく広々とした食堂に響き渡るだけであつた。掴んでいるモノは破れたままで何も変化しなかつた。亜衣夢は濁つた目でレミアの方へ顔を向ける。

その時レミアは「あーあ、失敗したwww」という目でこちらを見ていた。アリスは「ま、そんなものよね。」パチュリーは「あらら、お気の毒に。」

それらの意味が三人の目から伝わつた。亜衣夢は何語かもわからない言葉を発してこの場を去つた。

「……あれは少しやり過ぎじゃない？ レミィ。」

「そうかしら？」

「あまりイジメると後が怖いわよ？ ああいうのは怒つたとき何するか分からないんだから。」

「……そうね、少し控えるとしますか。」

そして三人は再び紅茶を飲み直した。その後何食わぬ顔して咲夜が戻ってきたのでデザートなどを出させて他愛の無い会話が始めら

れた。

その頃垂衣夢は……

「戻れえ〜！ 治れえ〜！」

自室にてまだ諦めきれずTシャツの蘇生(?)に励んでいた。しかし現状変わらず破れたTシャツはそのままであった。

「くそお、治んねえ…何で？ あの時は瓦礫が元の状態に戻ったじゃんか……」

頭を抱え悩むがそれだけで何も変わらない。時間を見て再度何度も試してみたが意味はなかった。繰り返すうちにもう無駄だと完全に理解しきったのでやめてベットのの上に寝転がる。

「……はあ、何で出来ないんだろ。破かれて着れなくなったことよりも、あの場所で発揮出来ない方が悔しいや。」

「何をそんな酷い顔しているのよ。」

「それですね……って！」

亜衣夢は飛び起きてその声の主の方を向いた。そこにいたのはいつも夢の中に出てきて自分に語りかけてくる、紫出会ったのだ。流石に慣れていた亜衣夢もこれには驚きバランスを崩してしまいベツトから転げ落ちてしまった。

「あらあら、大丈夫かしら？」

「だ、大丈夫……です。」

「それでどうしたのよ。お姉さんに言ってみなさい。」

「お姉っ……て言うか何があったのか解ってますよね？」

「もちろんよ。」

「じゃあ聞かないでくださいよ。」

「あらら？ 随分やられたようね。あなたも忙しい日々を送っていることだ。」

「おかげ様で。」

「まあ、とりあえずアドバイスでも上げるわ。どうしたら能力を発動できるのか。それは……」

コンコン

「亜衣夢いる？」

「あ、咲夜さん。」

「邪魔が入ったわね、時間がないから簡単に言うわね。『どこまで治すのか。』これが大事。それじゃあね。」

紫はそういつもらしからぬ早口で言いスキマを出して咲夜が入ると同時に消えていった。咲夜はキョロキョロあたりを見回し不思議そうな顔をしていた。

「いま誰かいた？　なんか覚えのある妖力を感じただけけど。」

―ドラゴン〇ールか（あ、今回は仕事してる。）

「それよりも大丈夫？　随分と荒れたって聞いたのだけど。」

「ああ、それなら大丈夫です。俺は立ち直りはそこそこ早い方なので。」

亜衣夢はそう言うが咲夜は心配そうな顔でこちらを見ている。正直に言えば辛いけど、ここで雇われている上使用人という底辺地位のこともあり無理せずにはいられなかった。

「あ、そういうばアリスがあなたに用ができたって言ってたわよ。」  
「……………え？」



場所は戻り食堂

「……それで、俺に用があると聞いたのですが？」

「そう、あなた一応オーガを倒したのよね？」

「まあ、トドメ的に考えましたらそうなりますが……」

——嫌な予感しかしない。だってこの人の目がなんか輝いてんだもの。

「あのオーガってかなり頑丈で厄介だったのよね。でも、それを倒したなら実力はあるわよね？」

——……あ、これアカンやつ。回収したなこれ。

「ちよつとでいいわ。私の……」

——うわあ、聞きたくない聞きたくない、やめてやめて話さんといてなく頼みますからお願ひしますお願ひしますおねg

「相手になつてくれない？」

ーチーン(・ω・)  
(

やっぱり、逃げることはできなかったよ・・・

## 妹様とお散歩

「はあああ、疲れた……」

巨大な館の紅魔館こ廊下はそれにふさわしい長さである。しかし亜衣夢の口から漏れた言葉はその長い廊下全体に響くような声だった。

何故こんなにも疲れているのか。それは昨日強制的にアリスの試作人形の相手をしたからである。その攻撃力、速度、耐久性、どれも自分にとっては凄まじいものだったが何よりアレに合わせて複数の上海を操るアリスは本当に凄いと思った。

「アレのおかげで身体中バキバキだよ……結局能力は出なかったし。」

そうぼやきながら亜衣夢はしゅしゅ長い廊下の掃除を始めた。



夜になり亜衣夢は仕事を終え晩食の時間にした。亜衣夢が夢中になって食事をしているとレミリアが話しかけてきた。

「亜衣夢、あなたにお願いがあるのだけど。」

「……はい？何でございましょうか？」

口に溜め込んでいたものを即座に飲み込み、返事をした。あまりにも急いだせいか喉に食物が詰まっている感じがしたのでその場にあつた水を飲み落ち着かせた。

レミリアはその光景を呆れた顔で見ていたので亜衣夢はコホンと咳払いをして気を取り直した。

「それで、お願いと言うのはなんですか？」

「フランを散歩に連れて行ってほしいのよ。」

「……マジデスカ？」

「マジよ。」

レミリアの口から出た言葉は予想をしない言葉だった。まさかの散歩。しかし、亜衣夢は疑問に思った。いや、答えは既に出ているが念のために恐る恐る聞いた。

「なんで、自分なのですか？」

「何でってそれは、あんたが一番暇だからよ。」

「……デスヨネ、わかってましたよ。咲夜さんはまとめ役、美鈴さんは門番、パチュリーさんは図書館管理。ごもつともですよ。ちくせう……。いや、暇じゃないよ！」

「手な訳で食べ終わったらお願いね。今は庭で美鈴が相手しているわ。」

「了解です。」

「散歩か、まあ息抜きにはちょうどいいかな？」

ピコン（フラグ）

「ん？今なんか建った？ まあ、いいか。」

このあと恐ろしい事になるだなんて亜衣夢は思いもしなかった。

◆  
　　＼紅魔館庭園＼

夜の澄んだ空気と湖からくるヒヤリとした冷気が辺に漂う。その空気を身体中で感じながら歩いていると足元に妙に柔らかい感触がした。それと同時に変な鈍い声も聞こえてきた。

既に一度足元ではトラウマを持っている亜衣夢はその瞬間背筋に

寒気が走り下を見ることができなかった。

—うわああ、嫌だわ—下見たくねえわ—確認したくないわ—。

そうも思いつつ顔をそのまま目線のみを下に向けるとそこには、横たわっていた美鈴の死——

「死んでません!!」

「うおっ！ ナレーション遮ってきた!? てか、美鈴さん？」

「あ、亜衣夢さん、やっと来てくれたんですね。」

「どうしたのですか、こんなところで寝て。」

「いやあ、妹様の相手をしていたら弾幕ごっこに持ってかれて、このざまですよ。」

「……ええ？」

すると向こうの草影に見覚えのあるキラキラ色鮮やかに光る宝石のようなものが横に並んでいた。まさかと思う暇もなくソレは亜衣夢に飛び交ってきた。

「やっと来たのね！ 亜衣夢!!」

亜衣夢は思わず体に力を込めて衝撃に耐える体制を無意識のうちにとる。亜衣夢のとった行動は正解だった。いくら幼くても（精神と見た目が）吸血鬼は吸血鬼。数メートルあった距離は瞬きするうちにつめられ自分の腹部に激突してきた。

「ゲボバァー!」

亜衣夢はソレを抑えきることができず奇妙な声を上げて飛ばされ、そのまま地面に墜落した。あまりの衝撃で亜衣夢は一瞬意識が飛ぶが、すぐソレに起こされてしまった。

「お、いい、大丈夫?」

「だ、大丈夫・・・です。妹様・・・カフツ。」

フランドールは亜衣夢の頬をペチペチと叩いて来たので何とか正気を保つことができた。死にかけの体を死ぬ気で起こし、近くにあった木に寄りかかり体制を整えた。

「じゃあさ! 早くお散歩行こう!」

「えっ? いや少し休憩させ」

「レッツゴー!」

フランドールは亜衣夢の有無聞かず手を掴んだと思えば

先程と同じように物凄い速さで門を走り抜けた。亜衣夢はやはりその勢いに勝てず引つ張られ空を浮いてる状態であった。

「かんべんしてくださいーい!」

◆少年輸送中

ここは湖周辺。そこから直接くる冷気はかなり冷ややかなものでブルツと震え上がるほどだった。今日の夜空は雲がほとんどなく月の光が美しく湖に映えている。

だが亜衣夢はそんなものを感じてる余裕などなかった。フランドールにいいように引つ張られ体はボロボロである。その前から突撃をくらい致命傷だったのが、今ので更に悪化したのだ。

それでも亜衣夢全力で平気を装った。

「うわあー、ここ結構寒いわね!」

「・・・そ、そう、ですね・・・カフツ」

「あ! なんかいいる!」

「な、なんか? 一体何・・・」

亜衣夢の目に入ったのはまさに幻想だった。湖の上で誰かの人影が見え、踊っているのだ。その周りにはキラキラ光り輝く結晶が舞っておりさらにその結晶は月の光を反射し湖に映し出しより一層の美しさを表していた。

その現実離れた光景を目の当たりにし喋ることができなくなった。

「何かなあれ？ もっと近くに行こう！」

「……」

「……ねえ、ねえってば！」

バチン！

「あべしい！」

「聞いている？」

「あ、すみません、上の空でした。」

「もおうちやんと聞いてよ！」

「あ、はい、ごめんなさい……」

「じゃあ早く行くわよ！」

「えっ？ ま、待っててください！」

フランドールは亜衣夢の返事を聞くことなく湖の方へ走っていったので亜衣夢もそれに急いで続いた。

しかし亜衣夢は湖のすぐ近くに來てあることに気がついた。

―俺、どうやってあそこまで行くんだ……？

人影が見えるのは湖の真ん中辺。フランドールは飛ぶことが出来るので（あんな翼でどう飛ぶのか不明だが）そこまで飛んでいけるが、亜衣夢は飛ぶことなんて到底出来ない。

亜衣夢は水辺まで来て足を止めた。フランドールは既に飛んで

行って完全に置いてけぼりにされてしまう。結局亜衣夢はフラン  
ドールと2つの人影のやり取りを眺めることしか出来なかった。

—あゝあ、何か妹様と誰かやってんなー。何喋ってんだろなー。  
あ、戯れ始めたよ。いいなく暇だなく。やべえ、暇すぎで眠くなつて  
きた……

亜衣夢は知らぬうちにウトウトとしてしまい眠りに落ちてしまっ  
た。

と思ったその瞬間。

ヒュン

何かがすぐ耳元を通つたのと同時に目が覚める。その刹那カツン  
と甲高い音が後ろの方で鳴り響く。亜衣夢は錆びついた機械のよう  
なきこちない動きで後ろを向くと不思議なものがあった。

「こ、氷？」

それはとても鋭利なナイフのようであり、冷気を放っている、氷の  
刃であった。この刺さっている向きからとんできたのはフランドー  
ル達のいる方。後ろを振り返ると何と先程まで戯れていたはずが弾  
幕ごっこを開始していたのだ。

「……何でえ？」

止めるべきか止めぬべきか。しばらく迷っていたがあまりにもあ  
の弾幕ごっこが綺麗だったので見学することにした。



—すげえ、妹様じゃない方はめっちゃ弾幕出してる。でも、妹様はあれを軽く避けてる。どちらも、すげえな。

そうして眺めているとついにフランドルが動いた。今まで避けるだけだったがそれに飽きたのか立場を一転し攻撃側に回ったのだ。おもむろに手を上にかざしたかと思えば2つの人影は一目散に逃げていった。

亜衣夢が啞然して見ているとフランドルの手が紅く光り始めたのだ。それは形を作っていき紅く、巨大な剣となった。

「まどめてくらえ〜！」

『レーヴァテイン!!!』

その声は亜衣夢のところまで聞こえるくらい大きな声であった。フランドルはその大剣を横に大きく振り人影を追撃し、見事撃墜に成功した。

ピチューン

それと同時に何か変な効果音も聞こえたが特に気にしないことにした。そして人影を倒して満足したのか円満な表情でこちらへ戻ってきた。亜衣夢にとってその笑顔は逆に恐怖をそそる笑顔となっていた。

「な、何をしてきたのですか・・・？」

「何って、倒してきたのよ。あいつ生意気だったから。」

「あ、あいつ？」

「氷の妖精よ。何か『あたいが一番強い』とか寝言言ってるから目を覚まさせたのよ。」

「いや、目が覚めるどころか永遠の眠りにつきませんでした？ だけど飲み込んでおこうこの言葉。」

「じゃー！ お散歩の続きをしましょ！」

「ええ!?! あ、はい！」



一方その頃、紅魔館では……

「亜衣夢は大丈夫なのかしら……」

食堂にてレミリアとパチュリーが亜衣夢の帰りを待ちつつ紅茶を飲んでいた。しかし、予想していたとはいえ帰りが遅いものでパチュリーは心配の言葉を漏らした。

「大丈夫でしょ。パチエは気にしすぎよ。」

レミリアはやれやれという顔でそう言った。それを聞いたパチュリーは軽いため息をついてから紅茶を一口飲んだ。

「レミイは気にしなすぎ。……いくらなんでも、相手がフランなのよ？」

「大丈夫よ。亜衣夢の運命を操作したのだから。」  
「えっ。」

「確かに運命を見れば亜衣夢が重傷、もしくは死ぬのもあったわ。でも無事帰還する運命も見えた。だから、大丈夫。」

「……そう、じゃあ信じてみるわね。」

「……信じる必要は無くなったわ。」

「え？」

「来たのよ。亜衣夢とフランが。」

パチュリーが窓を覗き込むとレミアアの行ったとおりフランドールが門を通りここへ向かってきているのが見えた。パチュリーは生存を確認してまた席につき紅茶を一口飲む。

しばらくしてゆっくりとした足音が静寂の廊下に響き渡り聞こえてきた。それは徐々にこの部屋に近寄ってきて、扉の前で止まるとまるで忍び込むように扉をゆっくり開ける。

扉の先に立っていたのは完全に眠りに落ちていているフランドールを背負った足取りのおぼつかない亜衣夢の姿だった。

「い、今・・・帰りました・・・」

「あらあら、随分とお疲れなようで。」

「そりや三時間もフランの散歩に付き合えばそうなるわよ。」

「さ、三時・・・間？」

「そうよ、出発が十時ちよつと過ぎで到着が一時弱。早く寝ることをお勧めするわ。フランは私が部屋に運んでおくから。」

亜衣夢は疲弊仕切って声すら出せず頭をやや下にし、部屋を出ていった。そして間もなくガン！だとかバン！という壁に激突する音が度々聞こえてきた。



「あああああ、疲れが消えていくう。」

亜衣夢は寝る前に浴場へ行き湯に浸かっていた。ここの湯は不思議な色と香りだったが効能は抜群で疲れが湯に溶け出して行くようだった。

「はあああ・・・っ痛、何だ？」

亜衣夢は肩に鋭い痛みを感じた。よく見てみると肩には二つの小さな穴が開いていた。しかし不思議なことに傷口は新鮮なものなのに血が出ていない。

「いつの間になんか……まあいいか。」

亜衣夢は最初は不審に思うが特に気にすることもなく風呂を上がった。



紅魔館地下室では……

「……よいしょっと。……まったく、いくら吸血鬼でも所詮は子供ね（精神年齢が）」

パチュリーはフランドールを部屋まで運んでやりベッドの上に乗せた。スヤスヤと安らかな顔をして寝ているその姿を見ると、少し気分が和らぐが元を思い出し正気に戻る。

「やれやれ、こんなのが本当に吸血鬼なのかしら。」

パチュリーはひとつため息をついてフランドールを見る。すると、フランドールは不意に寝言を言い始めたのだ。

「んんんんんん……不味い……」

「……？　まあいいわ。それじゃお休み。」

そうやってパチュリーはこの部屋を出ていった。フランドールはその後寝返りを打ってまた寝言を言い始めた。

「  
・  
・  
・  
不味い  
・  
・  
・  
血  
・  
・  
・  
あい  
・  
・  
Z  
z  
z  
・  
・  
」

## 妖精メイド

ドンツ!!

「きやつ!」

「うおっ!」

亜衣夢が廊下のモップ掛けをしていると角から何者かが出てきて衝突してしまった。両方尻もちをついてしまい腰を打ってしまった。相手を確認すると少し小さめの女性だった。紫色のシヨートヘアでそれ以外は普通のメイドだったが決定的に違うところがある。羽が背中に生えているのだ。しかし、亜衣夢はそんなことも気にせず土下座の体制に入る。しかし、それよりも先に女性が謝った。

「ああ、すみません! ついブーツとしていて…」

「あ、ああいえいえこちらもしません、不注意でした。」

そうやって片方はペコペコ謝りながらその場から逃げだすようにして向こうへ走っていった。亜衣夢もその姿が消えるまで同じく頭を下げる。姿が消えたのを確認し、亜衣夢も仕事に戻る。

しかし、亜衣夢には1つ疑問があった。

「あれ……誰?」



「あんた今つ頃?」

レミリアの第一声はこの一言だった。自称カバールガラスのハートの亜衣夢にとってはこの一言でも精神にきついダメージを与える。

「もつと早く気付くものじゃないの? あなたが来てからもう何週間

も経ってるのよっ。」

「いや、そうですけど……」

「まあ、どうせあれでしょ？ 作者が書き忘れても」

「わー！わー！わー！ メメタアな話はダメです！」

「やかましいわね。」

「と、とりあえず教えてくださいよ！ あのなんか羽の生えたメイドさんの事をー」

亜衣夢は必死に、全力を持ってレミリアの発言を阻止しつつ本題に戻した。レミリアはやれやれという顔したかと思えばいきなり咲夜を呼び説明を任せ部屋へ帰っていった。

「……ご苦労様です本当に。」

「……とりあえず説明するわね。それらは『妖精メイド』って言うのよ。」

「妖精メイド……?」

「そう。うちって広いじゃない？だから従業員を妖精にさせてるのよ。」

「何人くらいいるのですか？」

「んー…三十人以上はいるはずよ。」

「あれ？ その割にはあまり会わないような……」

「警戒されてるのよ。」

「……」

この時亜衣夢は

(…)

こんな顔になっていた。

「彼女等はどこにでもいるし、いくらでも湧いてくるからいいのだけど、ちよつと手際が……ね。」

咲夜は眉間を押さえてひどく悩む。この様子を見て余程なんだなと亜衣夢は確信する。

「ま、あなたが来てくれてよかったわ。あの子達より余程いいもの。」

——これは、素直に喜ぶべきなのか？それとも……まあいいや。

「あ、ありがとうございます教えてくださいまして。」

「いいのよ。それに、知らないままだったら色々あれでしょ？ 仲良くするのよ。」

「わかりました。」

こうして二人とも仕事に戻った。亜衣夢は道中に何回か妖精メイドにあつたが咲夜の言つたとおり警戒され、心の中の何かが砕けた。



「くっそう……そんなに俺怖いのかよ……」

メンタルをブレイクされた亜衣夢はうじうじしながら廊下の掃除に励んでいた。たまに通りすぎる妖精はやはり警戒して近づこうとしなかった。

そうしてうちに亜衣夢のカバーガラスハートはどんどん砕けていった。

「く、こんなにも辛いものなのか……」

「あ、あのお……」

気付くと亜衣夢のすぐ横に自分とぶつかった妖精メイドがいたのだ。亜衣夢はまた避けられるのではとビクビクしていると、メイドはいきなり頭を下げたのだ。

「ごめんなさい！ あの時私怖くて……逃げるように戻ってしまいました



た……」

「……………へ？」

「わざとじゃないんです！ ただ、人間って聞くとトラウマが……」

——ト、トラウマ？ 一体何があったんだよ……

「で、ですが！ 咲夜さん達から聞いても悪い人ではないと聞いて、私悪いことをしたなど……グスツ」

「ええ!? わわわ、わかりました、大丈夫ですから！ 怒ってないから、とりあえず泣かないでください！ 泣かれたら俺がやらかしてって思われるから！」

「あ、すみません……」

「と、とりあえずはまあ、よろしくお願いします。」

「——！ はい！ こちらこそ！ 私、『ロイア・パリミア』と言います。気軽にロイアとお呼びください。」

「俺は、知ってるとは思いますが三紗亜衣夢。亜衣夢でいいですから。」

「……グスツ」

「えええ!? なんでもまた泣くのですか!？」

「いえ、ちよつと嬉しくて……すいません……」

——……この絵って何も知らない人から見たらヤバ目なやつだよね？……誰も、見てない、よね？

亜衣夢はそう信じて後ろをチラツと見る。すると、後ろの方で妖精メイドが見ていた。目と目が合いしばらく硬直してしまい、その後逃げ出した。

——ああ、また変な誤解を生んでしまったな……

亜衣夢は小一時間かけてこの誤解を解いたのだった。



自室にてく

「ああ、疲れた……」

亜衣夢の唯一の至福の時間の昼休み。この時はほぼ誰にも邪魔されることはないから存分に休むことが出来る最高の時間。

「さあ、寝るぞー！」

目覚まし時計を10分後に設定しベッドに入ってわずか五秒。亜衣夢は一瞬にして眠りについた。



「……おおお？ またここですか……ゆか………へ？」

「ワタシは紫様じゃない！ 藍様の式、橙（チエン）だ！」

目の前に現れたのは紫でも藍でもない。猫耳がついて二股に分かれた尾を生やした少女であった。橙はその小さな凶体と相反して大きな態度をとっていた。

「……いつもの方たちは？」

「ああ!? 貴様!! この方では不満というのか!？」

「わざわざ出向いてくれたのだぞ!? もっと感謝しんかいワレ！」

突如橙の背後に現れた2人の巨大な大男。1人は赤、もう1人は青色の体で頭の先に角が生えていた。それを見て亜衣夢はこいつらを鬼だと判断した。

「す、すみません。」

「いらー！ びっくりしてるでしょ!? あっち行ってなさい！」

『御意』

そうやって鬼はすたこらと向こうへ走っていった。亜衣夢はその光景を唾然として見ていた。鬼共が消えると橙はコホンと咳払いをして話しはじめた。

「実はですね、紫様達は忙しいとのことで私が代わりとしてきたのですよ。なんでも、『亜衣夢の体になにか異変があったら言つて。』との事です。」

—（異変？ マジで何のことだよ。というか俺の体に？）

「亜衣夢さん、なにかあった時のためこれを渡しておきます。」

そう言ううと橙は亜衣夢にいつぞやの怪しさ満点の薬を渡した。ラベルには前と同じドクロのマークに追加で *Dead* と書いてあり悪意を感じた。

—（うわああ、またこれかよ。いちいち怖いんだってパッケージがさあ。）

—あ、ありがとうございます？

「じゃあ、要はこれだけなので。さよなら〜」

—ええ？ いや、まって——



「み、味噌汁う!？」

亜衣夢は明らかおかしい言葉を発してベッドから勢いよく起き上がった。奇鳴が部屋中に響き渡り正気に戻ると恥ずかしさが込み上げてきてベッドの上で転がり回る。

（何だよ……味噌汁って。）

亜衣夢はしぶしぶ仕事に戻ることにした。立ち上がり部屋を見渡すとドアのすぐ前に例の薬が置かれていた。

一息ついて薬を手に取り机の上に置く。

「さて、行きますか。」



「……………本当に広いなここの風呂は!!」

亜衣夢は紅魔館の大浴場の掃除をしていた。普通の銭湯を遥かに超えるの広さを誇る浴場を亜衣夢は1人で掃除をするわけなので既に一時間並の時間はかかっている。

「てかさあ、誰が入るわけよ!? そんなにここの人口ってあつたっけ?」

そう愚痴愚痴いながらも手を止めることは決してなかった。しばらくしていると後ろの方から何か慌ただしい物音が聞こえてきた。

何かと思います一時中断して様子を見に行つた。亜衣夢がドアに手をかけようとした瞬間、いきなり開き何かが飛んできた。

「ど、どいてくださーい!!」

「へ?」

目の間に来たのは妖精メイドだった。しかしそれはロイアではなく、違うメイドであった。だが、亜衣夢はそれを認識する暇もなく妖精メイドの頭突きをまともに食らってしまった。



「……なるほど、つまりあなた達はそのグループで清掃等をしていて、そこの緑の髪の人が浴場からなにか聞こえるって言って先走ったら足をすべらせ……俺に激突したと。」

「うう、ごめんなさい……」

「すみません、こちらの監視不足でした。」

「いえ、もう大丈夫です。……あれ？　あなた達、あの時俺が小一時間かけて説得した人たち？」

「ああ！　あの時の！」

「ええと、確か……誰だっけ？」

「……」

「……あんなねえ。」

「私が改めて紹介します。」

「ロイアさん？」

「この緑髪のドジっ娘は『カミシヤ・アイエン』。赤髪が『レイ・ノーア』。そしてこの青髪の忘れん坊が『スーフ・トリノイア』。」

「ど、ドジっ娘って何よ！」

「忘れん坊……って？」

「お前……てか、私の説明わ!!？」

「レイは特にないのだもの。」

「ぐぬぬ……」

「とにかく、この人は三紗亜衣夢さん。ここで唯一の人間です。」

——ロイアさん、もう少しまともな紹介お願いします。人間って……

「よろしくな、亜衣夢。」

「こちらこそ、レイさん。」

「あ、ちよつといいですかあ？　みしあむさん。」

「……それって俺、ですか？　カミシヤさん。」

「はい。」

——なんだよその略し方。『みしあむ』って……

「1つ、言いたいことがあるのですが……」

「はい。」

「……………風呂掃除、大丈夫ですか？私のせいでだいぶ血が流れてま  
したが。」

「……………」

「……………」

「……………詰んだ？（ ・ △ ・ ）？」

## 大図書館

一体何時間経ったのか。そこは日の光が入らず今の時刻がわからない。体感的に三時間半、だが実際はそれより長い、あるいは短いであろう。

ジメジメとして埃やカビの臭いが所々からし呼吸のたび軽くむせる。こんな心も身体も悪くなりそうな場所に図書館はあった。

「亜衣夢さくん、そちらの方は終わりましたか？」

「いえ、まだです、こあさーん。」

「そうですから、では引き続き頑張ってください。」

「はい。」

亜衣夢はパチュリーの頼みで彼女自身が管理している大図書館の本の整理をしている。その広さは予想を上回る程であり、やっと7割の整理が終わったところである。

しかも人数は亜衣夢と『こあ』の2人だけである。こあというのはパチュリーの使い魔であり本名は無く小悪魔という総称で呼ばれるからはこあと呼ばれている。

「くっそ……なんでここはどこもかしこもだだっ広いんだよ……辛いわ。」

亜衣夢は大量の本を抱えながらそんな愚痴を静かにこぼす。その後すぐハツとし今の発言が聞かれていないか確認した。周りに誰もいないのがわかりホッとすする。

「てかさあ、こんな紅魔館が広いだけの話書いてたらそろそろスマホの前の人も飽き」

ナレーター↓(つ、▽、)≡つ)、旦、)…↑亜衣夢

……失礼、



しかし束の間。本棚の横から小悪魔がのぞき込むように出てきて  
亜衣夢は驚いたあまり本を落としてしまった。

「わわっ、大丈夫ですか？」

「ははははい、大丈夫ですす。」

ぎこちない返事を返したせいで何か怪しまれた目をされた。だが  
小悪魔はさほど気にすることもなくまた仕事に戻っていった。

「いつになったら終わるのやら……ん？　なんだこの本？」

片付けをしているとなにやら不思議な本があった。そこらにある  
本とは何かが違う。オーラというのがかんじられ、妙なちからがある  
ように思えた。

何かと思い亜衣夢は小悪魔を呼び聞いてみた。ところがここに長  
くいるはずの小悪魔でさえわからないという。

「パチュリー様ー？　なにやら見かけない本がありましたのです  
がー。」

小悪魔がそう言うとおのほうからゆっくりとした足取りでパチュ  
リーが来た。足取りこそ遅いがその目は今まで見た中でも活き活き  
としており余程の代物なのか。そう思えるほどだった。

「で、どれなの？　その本は。」

「はい、これなのですが。」

小悪魔が本を渡す。パチュリーは手にとった瞬間本を開き読み始  
めた。見た感じではさっと見てさっとページをめくるといふもので  
あり、500ページあるであろう本を一分で読み終えた。

「……なるほどね、これは『スペルブック』のようなものね。」

「スペルブック？ なんですかそれ？」

「魔力を得た本よ。本来は召喚や魔法を使うときに使用するものだけ  
ど、これはちよつと変わってるようね。」

「と、いいますと？」

「これは多少意思を持ってきている。付喪神になりかけているのよ。  
その証拠に、私から逃げようと少しだけ抵抗してるのよ。」

「パチュリー様、それどうするのですか？」

「んー、このままだと私達の魔力を糧に成長して邪魔になるから、今消  
すかしら。」

「け、消す!？」

「そう、消す。」

「でも、命があるのでは？」

「微々たるものよ。まだ考えることも出来ないから恐怖は無いはず。  
ただ、何かが来たとかそれぐらいしか思えないわ。」

「……………」

亜衣夢は心の中に何か靄のような感情が芽生える。無造作に消さ  
れる命。それに強い嫌悪感を抱く。その感情が伝わってしまったの  
か、パチュリーは少しため息をついた問いかけてきた。

「なら、あなたはどうしたいの？」

「え？」

「この魔本は私達の魔力を吸収して成長する。今はあれだけ大きく  
なって力をつければ意思もハッキリしてくる。そうなればどうなる  
か分からないわ。」

「……………」

「…気持ちはわかるけど、何か起こってからじゃ遅いのよ。」

「…じゃあ、ください。」

「えっ？」

「俺に、その本をください！」

その発言で辺りは静まった。小悪魔とパチュリーはあぜんとして驚きの表情すら出てこなかった。

「…正気？」

「はい。」

「あなたがもらってどうするつもりなの？」

それはもつともな意見だった。このまま育て上げれば、どうなるかわからない。が、亜衣夢は納得できなかつた。何もしてないのに消されるのが、認められなかつた。

「こいつ、魔力で育つのですよね？　なら、魔力の無い俺が持てば、大丈夫ですよ。」

「あのねえ、無理。魔力がないなら違う力を吸収するのよ。魔力の無いあなたは霊力を取られる。取られすぎれば死ぬのよ？」

「……」

「パ、パチュリー様少しいですか？」

「何？」

「あの、別に渡してもいいのでは？」

「あなたまで…どうなるかわかつてるの？」

「はい、ですがあくまで可能性の問題で本当になるかわからないじゃないですか。」

「……あくはいい、わかつたわ。」

パチュリーは深いため息をつきそう言った。その表情はもう駄目だなと諦めたものだった。パチュリーは苦い表情をしながら話を続ける。

「なら亜衣夢、あなたはやるべきことができたわ。」  
「え？」

「この本を、屈服させなさい。」

「…はい？」

あまりに突然のことで意味が理解できなかった。本を屈服させる。人はそれを聞いてどう思うかなど、言わずもがな。である。

「意思があるなら確実にこちらに反抗もする。なら、その芽を今のうちに潰すのよ。」

「ですが、どうやってですか？ 火でも近づけて脅すのですか？」

「魔本にそういった物理的なことは効かないわ。だから、魔本の中に入って倒してやればいいのよ。」

「中に入る…？」

「そう、正確には精神の中、ね。転送魔法というのがあって自分の体を一度原子レベルまで分解、そして今度は——」

「まあまあ、そんな話はいいとしまして。早速亜衣夢さんを移動させましょうよ。」

「…そうね、でもこれは亜衣夢あなた一人でやるしかないのだからね。本は全力を持って対抗してくるわ。…覚悟、できてる？」

「……っ。」

亜衣夢は少し怖気づく。それも仕方ない、一人で得たいのしれないのと戦わなくてはならないのだから。だが亜衣夢はそんな迷いをすぐさま捨て去り強く、言った。

「……出来てます。」

この一言でパチュリーは納得したのか本を手に持った。そして何やら呪文を唱えたかと思うと亜衣夢の足元に魔法陣が出てきた。と思えばすぐさま転送がはじまった。

「ちよっ、まだ覚悟はできても——」

魔法陣は亜衣夢の言葉を遮って飲み込んでいった。飲み込み終わると魔法陣は徐々に小さくなり、静かに消えていった。残されたパチュリーと小悪魔は亜衣夢のいるであろう本を心配した顔で見えた。



く魔本の精神内く

「……………ここが、本の、精神、内……………」

そこは何もない、真っ白な世界が広がっていた。きっと魔本の精神が未熟ゆえ、この世界となったのだろう。

歩いて見るが世界は変わらなく本当に歩いているのか疑うほどだった。

しばらくすると、純白の世界に黒い物体が浮かんでいるのが見えた。それは何か負のオーラを纏っているのがわかり、本の正体と亜衣夢は理解した。

「……………」

「……………これが、魔本?…」

「……………!…」

魔本は亜衣夢の姿に気が付くやいなやすぐさま襲いかかった。魔本の攻撃が亜衣夢に向くと世界が崩れ落ちるように一変した。純白の世界からあの大図書館へと移り変わり亜衣夢はあまりに突然のことで判断が追いつかなかった。

そんな亜衣夢にも魔本は容赦なく攻撃を仕掛ける。本が開き始めたと思うとそこから直径50センチぐらいの火球を二発放ったのだ。とっさの判断でギリギリかわすことはできたが、後ろの方で爆発が起

きたのを聞きゾットする。

「……………!!」

「くっそ！　まだ撃つて来んのかよ！」

魔本が再度火球を撃とうとしたので亜衣夢は急ぎ背後にある大量の本棚の裏へと逃げていった。魔本も逃がすまいと放つが亜衣夢の方が早く回避に成功した。さらに奥へ奥へと逃げ、魔本は見失ってしまふ。

「……………!?　……………」

魔本はその場に留まり本をたたみ浮遊していた。まるでその様子は亜衣夢の登場を待っているかのようだった。



「……………さて、逃げたはいいがどうするか。」

出来る限り逃げてきて本棚の影に隠れているが、反撃のしようが見つかからない。敵は魔本、『スペルブック』。魔法はもちろん、そのうち何かを召喚してくるであろう。

それにも関わらずこちらは丸腰で武器は何もない。弾幕は未だに撃てず能力もあてにならず。まさに絶望。人間一人がどうこうできるものではなかった。それを思い知らされる状況であった。

「くっそ…いや、考えろ。ここは図書館の中。パチユリー様やコアさんは何故かいないがあの特徴的な白な世界とは違って色々物がある。」

本棚の影からちらりと魔本の姿を確認する。どういふことか魔本は先程の場から動こうとしなかったのだ。疑問に思ったが今はそれを考えている暇はない。

体を元の位置に戻そうとすると肩が本棚に当たってしまいバサバサと本が落ちてきてしまった。亜衣夢は焦って戻そうとすると過って踏んでしまいその上破ってしまった。

「……まじかあ……」

それを拾おうとすると亜衣夢の手がほのかに光り始めたのだ。亜衣夢は一瞬驚いたがもしやと思い破れた本に触れると破片同士がくつつきあつて元のものに戻ったのだ。

「……こ、ここので……出来たのか!？」

亜衣夢はもう一度試しに本を取り出し破いてみて意識して触れる。すると、また同じように直ったのだ。確信した、ついに能力をこの土壇場ではつきできたのだ。すると、能力が出てきたついでに魔本を倒す手が浮かんだ。

「……うまくいけば、勝てるかも……」

僅かな期待と大きな不安を胸に、亜衣夢は早速仕掛けにでた。



□ここは、どこだ？ なんだ？

生まれた時はぎゅうぎゅうに敷き詰められたところにいた。自分を押しつぶすように寄ってくるモノに問いかけるが返事は来ない。

□何だ？ こいつら、□が聞けないのか？ くっ、なんとか、抜け  
出せ……

バサッ!

□いてて…なんとか出れた。 …ん? 動けない…? 何でだ?  
まあいいや。後で考えよう。 …お? 誰か、来た?

「…あら? 本が落ちてるわね。」

□…なんだこの小娘。へんな格好だな、紫で部屋でも帽子を被つて。おい、俺を外に出せ。…いや、待ってください元に戻さないでごめんなさい私が言い過ぎましただから——

ボスッ

□ちきしよおおおお!!

「なんで落ちてるのかしら…小悪魔、見落としたわね。まったく。」

□…ちくしよう、出鼻くじかれたぜ。あいつ、許さん。なんかあいつの近くにいと力が沸くから、何とかして、反撃してやる!

〜3日後

□…よし、今日はへんな男が来るらしいな。そいつをのつつて、やつを倒す!!

「消す。」

□…へ?

「邪魔になるし。」



「でも、命があるのでは…。」

□「そ、そうだそうだ！俺だつて生きてるんだぞ！」

「微々たるものよ。考えることも出来ないはずよ。」

□「一寸の虫にも五分の魂！微々たるつてなに!?しかも俺は今立派に考えてます！くそう… やつべ。死ぬ。復讐の前に死ぬ。どうしようしようどうしよう」

「俺が、もらいます…」

□「…んん？ なんて？ もらう？ まじで？ F O O ! こいついやつ！ のつとるとかいつてごめんまじ！」

「靈力を取られすぎれば死ぬのよ？」

「……」

□「おおい！ そこ黙るなよ！ 反論して！」

「なら、本を屈服させなさい。」

□「んん？」

「ちよつ、まだ心の準備がー」

□「……あ、なんか来た。よし、なら俺はそれ相応の対応でやつを倒す!! さあ、来い!!」



□「……と、思ったのだが、全然来ねえ。先手必勝かけたが一目散に逃げおつた。…しゃあねえ、奴が来るまで待つとしよう。これぞ男気(?)！」

魔本がそう思い待ち続けていると、ついに亜衣夢の姿が見えた。時間にして亜衣夢が隠れた時から三十分は経っていた。

「ふうふう…よう、またせたな。魔本…」

□ ついに来たな…えーと…なんだっけか……………男!!!

「覚悟しろ…今からお前を……」

□ 観念せい…これで貴様を……

『屈服させる!!』

## V S 魔本

『屈服させる!!』

「おらああー!」

先手をうったのは亜衣夢の方だった。真っ直ぐに魔本へと向かっていきチャンスを掴もうとする。魔本は亜衣夢が来るのと同時に赤い魔法陣を浮かび上げらせそこから火球を何発も放つ。

—勝負は、ここで決める!

亜衣夢はポツケに隠し持っていた本の破片を幾つか取り出す。ここで、亜衣夢は先程の土壇場で出来た能力を発動させる。

『モノを回復させる程度の能力!』

能力発動と同時に手に持っていた破片が光だし、何処からか本が飛んてくる。亜衣夢が破片を手放すと飛んできた本と合体し、元の状態へ戻った。それらは丁度いい感じに火球を防ぐ盾となったのだ。

□何い!? あいつ、こんなことができたのか!?

「あつちい! …ふっ、どうだ? 俺の能力はまだまだ続くぜ!」

□くそ! 負けてられるか!

魔本は次に青い魔法陣を出す。亜衣夢はそれを見て一度引こうとしたが少し遅かった。魔法陣からはすでに魔法が出ていたのだ。その魔法は先程の火球とは違って澄みきった青色をした球体だった。

亜衣夢が同じように本を盾にして防ぐと、ソレは着弾と同時に水しぶきを上げながら弾け飛んだ。顔にかかる液体で判断した。

「これは…み、水か！ あいつ、火以外も使えんのかよ！」

□ふふふ、驚いてるな。だが、これで終わりでない！もう一つ、魅せてやる！

今度は黄色の魔法陣をだす。亜衣夢はそれを見て、次こそはやばいと確信した。その魔法陣からはすでにバチバチと静電気が音をたてていたのだ。

□喰らえ！

黄色の魔法陣からは亜衣夢の予想通り電撃の魔法が発動された。その電撃は放射状に広がっていき途中にあつた水により濡れた本に当たると一瞬にして黒焦げになった。

「やっべえ！ あの水、ただの水じゃねえ！」

亜衣夢はソレを間近で見てさらに恐怖する。電撃はその本のところでちょうどきれてしまっていたので亜衣夢に当たることはなかった。

しかし、それでも脅威なのは変わりない。どれも当たれば致命傷レベルの魔法。一つでも当たってしまえば終わり。それが亜衣夢の足をすくませる原因となった。

「く……。」

□ふふふ、どうだ！ 貴様と俺とでは雲泥の差であろう！ どんなに本の盾を作ろうと俺の魔法の前では無意味よ！

明らかに不利な状況。普通ならここで白旗でも上げて降参するだろう。しかし亜衣夢は違った。目にはまだ力がある。まだ、この形勢を一人で逆転させる手があるのだ。

—もう少し、もう少しなんだ…あと、あいつが少し…

□ん？ もう終わりなのか？ なら仕方ない、これで終わらせてやるよ！

魔本はとどめを刺そうと赤い魔法陣を出す。ただの魔法陣ではない、今までよりも巨大であり確実に亜衣夢を殺しにかかったものだった。だが亜衣夢にとってそれは最大の好機でもあった。

□ふふふ、これなら避けれまい。さっきのように本でガードするがよい。全く無意味だがな!!

「……………おい。」

□ん？

「そんなにでかいんだったら、火の玉出すまでの時間も長いんだろ？」

亜衣夢は魔本を舐めたような口調で尚且つ挑発するように言った。魔本はだから何だというように無視して準備を進めた。魔法陣からは陽炎が発生しており確実に火力の違いを指摘できる。

それなのにも関わらず亜衣夢の顔には恐怖を感じられなかった。逆に、勝ち誇った顔であった。

□おのれ…だが、なにができる？ 貴様のそんな余裕ももうこれで終わりだ。これを喰らえば灰すら残らん。…チャージ完了。

魔法陣から巨大な火球が溢れるように一部を見せる。その一部分の大きさすでに亜衣夢と同じくらいであった。熱さも比例した大きさで亜衣夢はあまりの熱さで体をそむける。

□いくぞー！

「…この時を、待っていたぜ。」

□!?

亜衣夢はポケットに入っていた木の破片を取り出し魔本に見せつける。破片を持っていたその手には切り傷がいくつかあったのを魔本は確認した。

「これを手に入れるの大変だったんだよ、まさに骨が折れるような作業だった。で、これなんだか分かるか？」

亜衣夢は挑発するように見せびらかすが魔本には訳がわからなかった。ソレが解ったのか亜衣夢は完全なるゲス顔で答えた。

「これは本棚の一部だよ。」

□……………あ

ここで魔本は全てを理解した。今から亜衣夢が何をするのもかも。後ろからは何かを砕くような音が響いており、恐る恐る後ろを向く。

メキメキイ…バキイ!!

眼中に迫ってきたのは魔本が発射しようとした火球と同じぐらい巨大な本棚であった。ソレは亜衣夢の手元の木の破片に向かって恐ろしい速度で迫ってきたのだ。

□何い!?!こ、こんな本棚ぐらい、破壊してやる!

魔本はやむを得ず溜めに溜めた火球を急遽本棚に向けて放つ。火球が本棚と接触すると普通なら本棚の方が爆発し破壊されるはずだった。しかし、現実は違い火球が弾かれるように四散した。

恐らく唾然としている魔本に向けて亜衣夢が勝ち誇った口調で淡々と言い放つ。

「お前が最初に撃った火の玉、あれ本棚に当たってたんだけどよ、本棚

がほぼ無傷だったんだよ。多分パチュリー様辺りが何か仕掛けをしていて、だから今もお前は壊せなかったんだ。」

□ちよつと待つてくださいやめて許しててください。

「悪いな。だけど、勝負だし…ね？」

□いや待つてほんとに慈悲をください慈悲を——

「じゃあの（ゝゝ）／＼」

亜衣夢は手に持っていた破片を手放し一目散に逃げ出した。魔本はその場から動くことができず迫りくる本棚にぶち当たってしまう。図書館中に激しい衝突音と本の崩れ落ちる音が響き渡る。

しばらく静寂が続き完全に魔本の動きが止まったことを確認すると、吊られていた糸を切られたように亜衣夢は脱力して倒れ込んでしまう。

「……………か、勝てたあ……………」

まさかここまで上手いくとは思ひもなかった。全ては運任せであり、もしも能力が発動しなかったら…と考えると亜衣夢のノミの心臓が痛くなる。

そうしていると周りの景色がどんどん剥がれ落ちるようになってしまう。それと同時に亜衣夢は徐々に意識を失っていった。

「よし…これで終わった…な……………」



「モンサンミッシェル!?!……………あれ?！」

亜衣夢は謎の奇声を上げて意識を取り戻し起き上がった。その奇声は近くにいたパチュリーと小悪魔を非常に驚かせるものだった。

「び、ビツクリした…」

「亜衣夢、起きたのね。目を覚ましたということは、倒したのね。」

「はい、やってやりましたよ。」

「…そう。よかった。」

二人は安心した表情で亜衣夢を見ていた。亜衣夢は自分が眠っていた間に何か起きたのかを聞いてみると驚きの物事が起きていた。

まず一つは本棚が揺れたり、本が大量に落ちてきたりなど魔本の精神内と同じようなことが起きていた。その証拠に辺りが本で散らかっているのがわかり、さらにへこんでいる所も多々見られた。

「そういや、なんで魔本の攻撃は効かなかったんだろう。」

「？ なんの事？」

「実は…魔本が火の玉とか水の玉とか雷とか、いろいろな魔法？を使ってきました。その時魔法が本棚に当たったのですが本棚はほぼ無傷でして…何ですか？」

「ここ一帯の物には『対魔力防壁』という魔法をかけたのよ。」

「対魔力…防壁？」

「そう、要は名前の通り魔法に対するコーティングをかけたのよ。そんじよそこらの魔法程度なら逆に跳ね返すこともできるのよ。」

「だから、あの時守れたのか…」

「…？ まあ魔本の精神内で何があったかはよく知らないけど私の魔法に傷つけるのだから、相当な威力のようね。あなたにかすったとしても、生きていられたかしらね？」

—ナニソレコワイ

「そ、それよりも何故そんなものをつけたのですか？」

「…前家に魔理沙が来たでしょう。」

「来ましたねえ。」

「あいつは堂々と魔法を使ってこの紅魔館の壁に穴を開け前々から目をつけていた本を素早くてにとりまた魔法を利用して帰る。」



この発言で確信した。対魔力防壁は、あの魔理沙をここに入れな  
い、そして閉じ込めて仕留めるためのものだったと。運良くそれが対  
魔本戦で使えたのは幸いだったがなにか複雑な気分であった。

パチュリィは相当な恨みがあったのか笑っていたが目が完全に死  
者の目であり亜衣夢は恐怖に染まった。それに気づいたパチュリィ  
はコホンと咳払いをして話を変えた。

「とりあえずは、お疲れ様ね。魔本は私が見ておくから明日来なさい。  
話はそこからよ。」

「えっ？ てことは今は…」

「もう夜よ。大丈夫、仕事に関しては咲夜に伝えたし、代わりに小悪魔  
に行かせたから。」

「はい？」

「亜衣夢さん：いつも御苦労様です…」

「ご、ごめんなさい！ 自分の仕事をやらせてしまつて！」

「いえ、いいんですよ…」

「じゃ、二人ともお休み。」

『お休みなさあ〜い…』

◆  
亜衣夢と小悪魔は疲弊仕切った状態で自室へ向かっていった。二  
人共床に着くとともに溶けるように眠ってしまった。

…：今日は何用ですか？ えーと…紫さん？

「あらあら？ 私がいない間に成長したわね。」

ええ、おかげさまで。

「今日はあなたに説明したいと思つたのよ。」

説明？ 何のですか？

「スペルブックよ。」

!?

「あの本は他のと違い自我がかなりハッキリしていたのよ。だから、

扱いを間違えれば屈服させたとはいえ、何かはしてくるわよ。そうならないため、今から教えることをちゃんと覚えてね。」

な、なるほど…

「まずスペルブックというのは魔法や召喚を手助けするものであってそれがあると魔力の消費も少なくなる。けれどあのスペルブックは自らが魔法を唱えているのよ。」

それは自我があるからですか？

「いえ、恐らくもともと本に備わってあった魔力が多かったのよ。それに合わせてパチュリーと小悪魔の魔力を吸収。そうして成長したと思うわ。」

そうだったのですか…

「だけど、それはあなたにとっては都合がいいと思うわ。」

えっ？ 何ですか？

「あなたがスペルブックを使えば、魔力を使わずにして魔法を唱えられるわ。」

!?

「魔法を唱えるには術者自身の魔力を糧にしなくてはならない。けれどもスペルブックが魔力を持っているから詠唱さえできればあなたもできるわ。」

ほ、本当なのですか…？

「ええ。そのために使い方を今から教えるわ。」

…お、お願いします！

「まずは、読みなさい。」

……………え？

「スペルブックを知りなさい。あれも一応本よ。なら読んでどういうものなのか理解しなさい。そうすれば自然とわかってくるから。」

そういうものなのですか…？

「そういうものよ。根気よくね。じゃあ、また会いましょう。」

ま、また突然のわかー



□……………おい。

—ん…んん？

□……………おい、そろそろ起きろ。

—なんだあ…声が…頭に…響く…

□仕事、行かなくていいのか？

—…仕事…？……………!?

亜衣夢は跳びはねるようにして起き上がった。頭の中に最悪の予感がよぎる。時計を慌ててみると、針は午前三時を指していた。

「…おいクソ本。」

□ん？ 何だ行かんのか？

「まだ…仕事の二時間前じゃねえか!!!」

亜衣夢は魔本を力任せに掴み取り大きく振りかぶってベッドのシートに投げつけた。魔本は抵抗することも出来ず叩き付けられてしまった。

□き、貴様…カフツ

「てか、何で話せんだこいつ…眠たすぎて気付かんかったわ。」

□ん？ そんなに不思議か？

「本が喋ってんだぞ？ 不思議っていうか不気味だわ。」

□おっ？ うまいこと言うねえ

—うっぜええ…

□で？ どうするんだ？ 寝直すか？

「どこのアホのせいで目覚めだから気晴らしに散歩でもしてくるよ…」

亜衣夢はまだ覚めきつてない目をなんとか開けベッドから起き上がるとあることに気づく。何故、魔本がここにいいのか。

バツと振り向き魔本を掴み、問いたです。

「お前…確かパチュリー様のところにいたはずだよなあ…なんでここに  
いんだよ…」

□なんだ今更。もちろん逃げてきたに決まってるんだろ。

「に、逃げてきた!? おいおい…」

□まあ、バレなきゃいいんだよ。

「そういう問題じゃねえんだよ…てかお前、どうやって話してんだよ。  
さつきから頭痛いんだけど。」

□ん? そりゃもちろん直接脳内に話しかけてんだよ。だからお  
前はさつきから独り言を言ってるようにしか思われない。

「……」

亜衣夢は振り返って後ろを見る。ドアは開いておりそこには何と  
も言えない目をした咲夜がいて目が合ってしまった。

咲夜は何事もなかったかのように振る舞いそそくさとその場を立  
ち去った。

「……おいカス本。」

□ん? なんだ? ……あれなんかデジャブ

「てめえのせいでまた誤解解くはめになったじゃねえかあ!!!」

□ぎにややああああ!!?

◆  
↳場所は八雲家にて…

「…紫様、亜衣夢様の様子はどうでしたか?」

「ええ…今はまだ大丈夫よ。でも、着々と進行しているわ。」

「なかなか進行が遅れているのですね。何故?」

「恐らく、レミリアの運命操作が無意識に発動して変えているのかも

「知らないわ。」

「そうなのですか…?」

「あくまで予想。今はまだ大丈夫よ。でも一つ気がかりがあるのよね…」

「気がかり…ですか?」

「亜衣夢の身体能力が上昇している傾向にあるのよ。吸血鬼の身体能力が備わって来てるのよ。」

「……………」

「でもまあ、しばらくは様子見ね。」

紫は隙間を作り藍と共にその中へ消えていった。残ったのはまだ寝ている橙の姿のみだった。

「んん…藍様あ……………」

## 再び人里へ

「亜衣夢はいるかしら？」

いきなり亜衣夢の自室に入ってきたのはモップとバケツを手に持っていた咲夜だった。突然の訪問に亜衣夢は驚きを隠しきれなかった。というか、ノックすらされ凶いきなり開けられてしまえば誰でも驚くだろう。

「どうかしたのですか？」

「ちよつと人里に行ってもらいたいのよね。色々必要なものがあつて…」

「あ、いいですよ行きますよ。」

「いいの？じゃあこの紙に用件を書いておいたから。お願いね。」

「了解しました〜」  
「あ、言い忘れていたけど。もう一人いるから、宜しくね。」  
「……はい？」

咲夜はそれを言い残してすぐにその場から立ち去った。その後ろ姿には何か違和感を感じ、亜衣夢の頭を過ぎるのはとある人物。今までのパターンではまともな者は来るはずない。

「い、嫌な予感しかしない…」

きつと気のせい。そう信じて亜衣夢は恐る恐る玄関へと向かって言った。しかし、亜衣夢の嫌な予感はバツチり当たっていたのだ。玄関を出て門の方へ行くと人影が二つ。

一つは門番である美鈴。これはいて当たり前だが、もう一つは見覚えのある姿だったのだ。メイド服で羽が生えていて青髪。そう、彼女だったのだ。

「ス、スィーフ…さん？」

「あ！亜衣夢さんやつと来ました！待ってたんですよ！」

「ん…？誰？」

「亜衣夢さんですよ！覚えてないのですか？」

「あ…いたね。そんなの。」

「そ、そんなのって…いや、そこはいいです。美鈴さん、この人ですか？俺と一緒に行くって人は…」

「そうなりますね…」

美鈴は申し訳なさそうにそう言った。おおよそこちらの心中を察したのだろう。それもそのはず。このスィーフこと『スィーフ・トリノイア』。彼女はこの紅魔館でも随一の天然であるのだから。

…いや、天然と言うよりは『何も考えていない』の方が正しいだろう。それぐらいのものであるのが人里へ行く。不安しか出てこないだろう。

「お嬢様は一体何を考えているのですか…」

美鈴は深く息を吐いてそう言う。レミリアの考えることは希に斜め上であることがあり、咲夜でさえ翻弄されてしまう始末なのだから。

それでも命令となれば従うしかない。主従関係とはこういうものである。

「…とりあえず、行ってきますね。」

「亜衣夢さん、達者で…」

「ん？行くの？」

「そうですよ、行きますよ。」

「んー。」

—なんだろう…子どもかご老人を相手にしてるみたいだ…

そんな感情を抱いて亜衣夢は人里へ旅立った。その時誰もが2人を心配した。本当に、帰ってこれるのかを……



「…………… はい、予想通りですよ!!」

亜衣夢は叫んだ。紅魔館を出てから早30分、まだ人里までの道程で半分も行っていない。亜衣夢が先日行った時はもう人里に着いて寺子屋の子達と話していただろう。

しかしどうだ。まだ半分も辿り着けて無い。スィーフがこれほどに手強い相手なんて亜衣夢は思いもしなかった。

「スィーフさん！いちいち寄り道しないでください！帰るとき真っ暗になりますよ！」

「あー… それは困るね。」

「そうでしょう、なら早く行きますよ。」

「うん… あ、チョウチョコ。」

「言ってるそばから!？」

亜衣夢はマツハ（あくまで気持ち）でスィーフを捕まえる。そしてスィーフの手首をがっちり掴み移動の主導権を握る。こうでもしなければ、帰るのは次の日になるからだ。

「…… なんで手首を掴むの？」

「それは、これ以上どこかに行かせないためですよ！」

「ふーん…。」

…… Dーt (ボソツ)

「何か言いましたか!？」



「んー？」

「すつとぼけおって…」

「あ、そうだ。えーと… 王蟲？」

『亜衣夢』！ですー！それは何処かのダンゴムシでしょうが！… それで、何ですか？」

「今からどこに行くんだっけ？」

「…」

亜衣夢は今一度大きく深呼吸をして心を落ち着かせる。2回ほど深呼吸をして、高らかに叫んだ。

「くつそめんどくせええええ！！！！」

◇

一方そのころ紅魔館では…

「亜衣夢は大丈夫でしょうか…」

咲夜は窓の外を見てそう言う。心配するのも無理は無いであろう。相手が相手であるのだから。それを聞いたレミリアは飲んでいる途中の紅茶を口から離して一言言った。

「大丈夫でしょ。」

「よくとまあ堂々とと言えるわね。相手はスイーフよ？」

「そうですよお嬢様。亜衣夢さん過労死しますよ？」

皆がそう言ってる中、レミリアは全く動じること無く話を聞いていた。まるでこの後の結末を既に知っているかのように、動じることが無かった。

その様子を見た咲夜とパチュリーは諦めが着いたのかハアツと息

を短く吐きしびしび咲夜は仕事に、パチュリーは図書館に戻った。

「ふふ… 頑張るのよ。」

レミリアは飲みかけであった紅茶を再び口元へ運び飲み直す。

◇

「… やつと… 着いた…」

「ん… ?(こころ)?」

「そうですよ、ここですよ。念願の人里!!」

いつもの倍以上の時間をかけて辿り着いたこの人里。亜衣夢はあまりの苦勞と感動に感極まって涙が出るのではというほどだった。

「では行きますよスイー… フ… さ… ん… ……」

早速目的を達成しようとスイーフの方を見ると、既に姿は向こうの店に移っていた。あまりの行動と忘却の早さに亜衣夢は啞然とした。しかしそうもしてられない、急ぎスイーフを捕まえ引きずるようにして走った。

「いい加減にしてくださいあああい！」

（十分後）

「… よし！もう、無いな… 目的達成！ゼエゼエ…」

「ZZZZZ…」

「ね、寝てる…」

スィーフはあろうことか寝ているのだ。亜衣夢が買い物している時も移動する時も寝ていたのだろう。ここまで着いてきたのが謎である。

「ちよ、スィーフさん！起きてください！もう帰りますよ!？」

「んーもう食べられない:」

「そんなテンプレ極まりないセリフなんて求めてませんから！起きてください!」

「: : : : ZZZZ:」

(もうダメだア: : おしまいだア!どうする: : いや、手段は幾つかある。)

手段1・意地でも起こす

手段2・置いていく

手段3・自らが運ぶ

手段4・己の無力に嘆き、悲嘆にくれ、絶望する。

(4は無いな。ていうかなんだよ、厨二か。2は: : まずいな。怒られる。てか殺される。1は、さつきやったやん。てことは: : : )

『2・運ぶ』

(これかあ: : : でも、帰るためだしな: : : はあ。)

しづしづ亜衣夢はスィーフを背負い運ぶことにした。小柄な身体のため重量に苦しむことは無かったが一番気になるのは周りの視線である。メイドを背負う外の人。なんとも奇妙な絵である。

(誰かに見られるのは仕方ない。だけど、アイツらにだけは見られたくn)

「あーあの時の!」

「: : : ( / 3 ( < )」

予感は的中。亜衣夢の前にはだかるのは、前回の人里でもいた、生意気な子ども達である。状況は最悪。初対面であの言われようなのだから、顔見知りとなった今何を言われるのか分かったのもではない。

他人の振りをして逃げようとした。が、しかし回り込まれてしまった。

「何してんのー?」

「だれその人ー?」

「まさか、よばい?」

「誰がするか!!てか今は昼じゃ!」

「おいっ」

ゴン×3

『きゅ〜』

「あ、あなたは!」

亜衣夢を助けてくれた人、それはあの時の人ではなかった。慧音ではなく、違う人だったのだ。彼女には、そこらの人とは違う雰囲気をただよわせていて、まるで何百年も生きているかのような貫禄をも感じられた。

なのにも関わらず見た目はとても若い。亜衣夢が唾然として見ているとそれに気がついたのかこちらを見てきた。

「すまねえな、またか?迷惑かけちまって。」

「はい、えっと...」

『藤原妹紅』（ふじわらのもこう）だ。慧音の古くからの知り合いだな、こいつらの面倒見てたんだよ。」

「そうでしたか!だから助けてくれたのですか。」

「そういうこと、こいつらはいつも手を焼かせてな。口だけは達者なんだよ。」

「なんだよー」

「文句あるのかー?」

「文句しかないよ。さっさと帰って算数やってろ。」

『むきー!』

子ども達は逃げるように走ってどこかへ言ってしまった。妹紅はやれやれといった感じになっていて、亜衣夢はそれを見ていることしか出来なかった。

「えっと、君はなんて言うんだ?」

「あ、三紗亜衣夢です。紅魔館の奴… 使用人をしています。(危ない… 奴隷と言いたいそうになった。お嬢様め!)」

「そうなのか? あそこは辛いだろ。レミリアの奴は我儘で面倒くさいし。」

「いや、意外とそうでもない一面もありますよ。」

「そうなのか?… ひとついいか。」

「はい?」

「それずっと背負っているが、辛くないのか?」

「… 辛いです。」

それもそのはずだ。今までずっとスーフを背負っていたのだから。いくら小柄であるとはいえそれを数十分も背負えば疲れるだろう。

流石に顔に出してしまったのか、その光景に耐えられなかったのか、妹紅はそれについて触れてきた。

「いいよ、私がおぶってやる。」

「え?」

「どうせ紅魔館まで運ぶんだろ? それぐらいしてやるさ。」

「すみません何から何まで。」

「気にするな、元々世話焼きな性分だから… よっと。」

そうすると妹紅は軽々とスィーフを背負い紅魔館を目指して歩みを進める。亜衣夢もそれに続いて歩く。スィーフは未だに眠っており、亜衣夢は重荷が無くなったはずなのに謎の疲れがドツと出てきた。

「君は外から来た人なのかい？」

「あ、はい。そうなりますね…。」

「帰りたいとかは思わなかったのか？」

「…はい。あつちには飽きたので。」

「…そうか。幻想郷は全てを受け入れるからな。君みたいな変わった一般人も、妖怪も、私みたいな奴も…な。」

「あ、そういえば疑問だったのですが、妹紅さん。」

「ん？何だ？」

「今おいくつd」

《パーフェクトフリーズ!!!》

《スターダストレヴアリレ!》

ピチューン

「亜衣夢ううう!」

突如亜衣夢の正面からやって来た球体は迷うことなく亜衣夢を飲み込んだ。そのすぐ横にいた妹紅は間一髪で被弾せずにすんだが亜衣夢は無事ではなかった。例の音と共にPを残して消えたのだ。

「だ、大丈夫か!」

「うう…なんと、か。」

「そうか…でも、残機がひとつ減ったな。」

「…?」

「…あのスペルは…魔理沙とチルノか？」

弾幕の出てきた方を見ると、そこには妹紅の予想した通り魔理沙と  
もう一人幼子の見た目の少女が戦っていたのだ。  
彼女らはなにか言い合いながら弾幕を放っていて近くに行くとか  
なりうるさかった。

「おい、お前ら何をしているんだ。」

「ん？おお妹紅か。いやな、ちよつと前に…。」

◇

数分前

「よう、チルノ。」

「よう魔理沙！」

「お前って… 馬鹿だよな w w w w w w」

「なんだと!?!誰が馬鹿だ！」

「お？怒った怒った！」

「クソー！」

《アイシクルフォール!》

「あつぶね！やったな！」

「こんにやろ〜！」

◇

「… てな訳だよ。」

「…」

「…」

『お前のせいじゃねえか!?!』

「ええ?。」

「いや、『ええ?』じゃねえよ！完全にお前が挑発したからだろ！」

「そうですよ！俺なんてとばっちり受けてますし！」

「そうか？ いやーそれはすまなかつたw」

『草生やすんじやない！』

「ハイ」

「まったく…」

「まあいいですよ、とりあえず行きましょ？」

「… そうだな。」

妹紅と亜衣夢（＋スィーフ）は魔理沙達と別れ紅魔館へ再度向かう。途中後ろの方でまた痼癩を起こしたような声が聞こえてきたが、二人共に無視をした。



～それから数十分後～

「やっとつきました～」

「おう、お疲れさん。それじゃここにこれ置いておくぞ。」

「いやいや、まるで荷物のように扱わないで下さいよ。確かにそんなかんじですけども。」

「おっとすまなかつた。全く動じなかつたのでな。」

「ZZZZZ…」

『…』

それから、亜衣夢は妹紅と別れしぶしぶスィーフを背負いなおして紅魔館の中へと入って行った。門に行くとき美鈴がまた居眠りをしていて亜衣夢は揺さぶり起こそうとするも返事が無かったので放って置くことにした。

その後怒鳴り声が聞こえたのは言うまでもない。

「三紗亜衣夢、只今帰還しました～」

「おかえり亜衣夢。無事で何よりね。」



「ふふ… どうだった、ソレの扱いは？」

「… どうだったと思います？」

「あ…：… なんとなく察したわ。というか、予想通り？」

「ソレのマイペースさには誰も勝てなかったのよ。そこで亜衣夢にやらせてどうなるか知りたかったのよ。ただそれだけよ。」

「なんかもう、お嬢様の無茶振りにも、慣れたような…：…」

亜衣夢は憔悴しきって床に座り込んでしまった。既に外は光を無くし闇夜となっていたのだ。体力的にも精神的にも疲れは酷いものなのは言うまでもない。

そして、そこから逃げるようにサツサと自室へと帰って行った。

「… スイーフ、解雇したら？」

「… 実際考えたけどダメよ。面白味が一つ減ってしまうもの。」

「レミイ…：… あなたは本当に暇が嫌いなのね。」

「言っただでしょ？永遠のような時間を待つのは良いけど刹那のような短い時間を待つのは嫌いだって。」

「長生きって不便ね。」

「ふふふ…：… そうね。なら、飲み直しましょう。この100年間熟成させたワインでも。」

「実際の熟成期間は一時間のくせに…：… まあいいわよ。今日は付き合うは。」

こうして紅魔館の静寂にグラスのぶつかり合う音、つぐ音が響き、芳醇な香りが辺りに広がっていった。

◇次の日◇

「…：… 何で。」

「ZZZZZ…：…」

「何でアナタがここで寝てるんですかああああ!!!!!!」

亜衣夢が寝ていたベッドに何故かスイーフの姿があった。その後、他の妖精メイドがやって来て問題となったのはだいたい予想がつくであろう。また亜衣夢は小一時間かけて誤解を解くのであった。

「ほんとに勘弁してください!!!」

## 天人襲来

秋も深くなったこの頃。亜衣夢が幻想郷に来てから数ヶ月経った。仕事にもなれ、レミリアの無茶振りにもなれた。ここ数日は特に事件も何もなく平和に過ごしていた。

・・・そう、今日までは。

「余計なナレーション入れんじゃねえ！」

□主人、何を言ってるんだい？

「いや、気にするな。」

亜衣夢は廊下を箒で掃きながら自室へと向かった。この仕事が終われば休憩であるからだ。スペルブックを連れながら淡々と掃除を続けた。

「てかなんだお前、丸くなって。」

□気にするな。

あの時は敵意剥き出しだったスペルブックも今では亜衣夢にしつかり忠誠を誓うようになった。亜衣夢はもう既にここの住人となってきたのだ。

「いやあ・・・このままずっと平和なら良いのにな・・・」

ピコン

□（あ、旗が建った。）

「何も起きなければなー。」

ピコンピコン

□（更に建った…主人、フラグ建築の天才か!?!）

「俺…この掃除が終わったら部屋にあるプリン、食べるんだ。」

□（もう辞めてえ!とつくにフラグ建築できる土地はゼロよ!もういっばいよお!）

亜衣夢は意気揚々と自室の扉に手を掛けたその時、フラグは回収された。扉を開けると同時に何かが自室を埋め尽くした。何かが落下した衝撃とモノの碎け散る音が亜衣夢の体を弾くように飛ばした。

「ゴ…ゴフツ…」

「いったらいい…どこよここ。」

面影すら残っていない部屋から見知らぬ声が聞こえてきた。亜衣夢は混乱状態となりただ立ち尽くすことしか出来ていなかった。なんの音だとすぐに咲夜が様子を見に来た。そして直ぐに酷い有様を見て驚愕するのだった。

「何が…あつたのよ!」

「ん…?この声は、咲夜?」

また先程の声が聞こえてくる。しかも、ソレは咲夜を知っていた。亜衣夢が咲夜の方を見るとこちらもソレを知っている様だった。

「…天子、そこで一体何してるの。」

すると瓦礫の中にいる『天子』と呼ばれた者はここらのものを全て吹き飛ばしたのだ。もちろんその破片は亜衣夢を襲う。亜衣夢はなす術なく破片と共に吹き飛ぶが咲夜はナイフで全て受け流す。

衝撃が収まると部屋から誰かが出てきた。

「いやあーごめんごめん。外の間人があるって言うのを聞いたからどんなのか気になって来たのよ…で?その人間は?」

「それならあなたが今踏んでいるわよ。」

「えっ、」

「…早く… 除けて… くだしやあ…」

「わっ!?大丈夫?」

「… 死にそうです。」

↳ 亜衣夢救出中↳

「では改めて！私の名前は『比那名居 天子（ひなない てんし）』よ！天人でもあるあなた達とは格が一つも二つも上の存在！その人間、天子様と崇めなさい！」

「馬鹿やってんじやないわよ…」

「えーと… 天子、様?」

「何あんたも乗ってるのよ。」

「何かしら!」

「その… 『天人』とは?」

「… はあ?そんなの知らないの?無知ねえー。」

「ゴフツ（^ q ^）」

「いい?天人と言うのはその名の通り天上に住む言わば貴族のような存在。それで… えーと…」

「… 天子、どうせ分らないんでしょ?勉強とかサボってん来たのもソレが目的… あってるわね?」

「うう、うるさい!とにかく偉いの!強いのよ!」

凶星のようだ。咲夜に指摘されると慌てて簡素な単語を使いはぐらかしたのだから。亜衣夢が微妙な顔をしているとそれを見られたのか天子は睨んできた。

「… まあとりあえず、お茶にでもしましょ。これの修理は私と妖精メイドがしておくから、亜衣夢そのポンコツ天人を連れていつてあげて。」

「誰が『ポンコツ天人』よ!!」

◇移動中ナリ

「コロ○か!」

「どしたの急に。『コロ助か!』って。」

「いや、突っ込まなければならぬと思ひまして。」

「そうなの? 『コロ助か!』って?」

□:.. おい伏字。

△はい何でございましょうか。

□次仕事しなかつたらクビな。2度とこの業界に来るなよ。

△ヒイイイ!!

(ん? どうした魔本。ブツブツ言つて。)

□ん?! いや、なんでもないさ。

「?? まあいいか。」

「:.. ちょっといい? 今更だけど、あなたが例の外から来た人間なん  
でしよ?」

「え? はい、そうですけど:..」

「ふーん:..」

天子は亜衣夢をぐるぐると周りながら見つめ吟味しているよう  
だった。亜衣夢はその意味がわからず硬直していると、いきなり両  
肩を叩かれたり顔を見つめてきたりと身体中を調べ尽くされるよう  
にされた。

「な、何ですか:..?」

「:.. いや、別に。」

—なんですのー? いや、そんなジロジロ見といてそれっすか? —

△、△、アアアア  
全く… 本当にこの人もお嬢様なんだ… か、ら…

亜衣夢はある事に気がついた。そう、今までの経験から見出せる未来を。亜衣夢は血相を変えてその真相を確かめずにはいられなかった。

「そういえば、比那名居さー」

「天子様！… よ。」

天子は亜衣夢が全てを言い切らないうちに言葉を遮ってきた。亜衣夢は納得しなかったが仕方なく言葉を言い換える事にした。

「… あの、天子… 様？」

「何かしら？」

天子は快く返事を返した。しかしその中には傲慢というかレミリアに近い態度が潜んでいた。

「天子様は偉いのですよね？それならお付の人みたいなのが来るのではと…。」

「… あ。」

（はいやっぱり！ワンパターン一つ入りましたー！これは… 来ー）

亜衣夢の予感完璧に当たった。本日2度目となる轟音と共に激しい閃光が撒き散らさせる。バチバチとスパークを起こしつつ何か姿を現した。

「… 総領嬢様… ここにいたのですね!!!」

荒声と共に稲妻が落とされる。その姿はさながらスーオーサイヤ

○のようだった。すぐ横を見れば天子が怯えた表情をしていた。

「… 亜衣夢、私は逃げる!!」

「えっ? ええええ!!」

天子は一目散に彼女を『総領娘様』と呼ぶものから逃げだした。しかしその刹那、落雷地点から更に電撃が飛ぶ。ソレは確実に天子を捉え、感電させた。

「きゆうく…」

「全く…………… あ、」

今ここでやつと亜衣夢を認識したのか、惚けた声が口から出た。

「…」

「…」

◇◇場所は変わり、中庭にて◇

「… さて、亜衣夢の部屋ならず私の館を破壊した理由、きつつちりと教えてもらいましょうか… ね?」

レミリアは完全に切れていた。邪悪なオーラが身体から滲み出て手に持っているティーカップは既に取手の部分が砕かれていた。

『はい、すみませんでした。』

「ほんとに何しに来たのよ… 天子、衣玖。」

「私は… 普通にその、外からの人間がどんなのかを見たくて…」

「はい、私はそれを理由に勉強から逃げた総領娘様を追いかけて…」

「… はあ、まあいいわ。修理は妖精共にやらせるとして、あなた達に何か詫びでもはせないと気が済まないわ。」



「わ、詫び…?」

「そうよ。何かぐらいしなさいよ。謝るだけじゃ…ねえ。」

—お嬢様キレてる!?!ちよいちよい!しまつて!その後ろから這い出てくるおぞましい怪物をしまつて!悪魔を召喚しないで!

「…そうだわ、その阿呆天人と亜衣夢、戦いなさいよ。それでせめて楽しませなさい。」

「…」

「…」

『えええええ!』

「なんで私がこんな以下にも雑魚そうで(グサツ)弱そうで(グサツ)脆そうな(グサツ)奴と戦わなければならぬのよ!」

「そ… そうですよ… カフツ」

「なんでって、ソノ通りよ。」

「… は?」

天子はレミリアの言葉の意味を理解できなかつた。いや、それは当然であろう。永く付き添っているはずの咲夜も同じく、理解できていないのだから。

「私は、貴方達に腹を立てているわ。ここまでボロボロにされてしまえば紅魔館の主としても黙っていられない。だから、貴方に屈辱を味わせるために、亜衣夢と戦わせるの。」

「何ですって…」

「いやいやいやいや!待ってください!」

「あ?」

シューーン(・ω・)(

「…いいわ、それなら私がつっても強いってとこ見せてあげる！えと… おうむ！」

「亜衣夢です!!!」

「そう、亜衣夢！まあ、安心しなさい。あなたみたいな塵畜生には本気は出さないわ。せいぜい… 2割ってとこね。」

流石の亜衣夢もその発言にはカチンときた。レミリアに言われるのは慣れているが、初対面の人にそんなことを言われるとなると亜衣夢も黙っていられなかった。

「良いですよ… やってやりますよ!!」

「良い眼をしているわ… これは少し楽しめそうね！」

「行くぞ！スペルブック！」

□あいや！久々の出番！

―パチュリー様直伝『アグニシャイン（簡易版）!!』

亜衣夢がそれを唱えるとスペルブックから直径30センチ近くの火球が数発放たれた。それらは天子の方へ飛んでいきホームミングしていた。しかし…

「あら？スペルカードは使わないのね。凄いいじゃない。」

天子は一切動揺を見せなかった。それどころか亜衣夢の技をよく観察し吟味していたのだ。

「だけどね、そんなやわな攻撃効かないわよ。」

天子は刀身の燃えた剣を取り出した。その剣は亜衣夢の放った火球をいともたやすく切り裂き、破壊した。

「な…！」

「あら？もう終わりかしら？だとしたら期待外れね。」

確かに今の技は開発途中であり威力も強くない。が、あれほどまでに簡単にやられているのを見てしまいメンタルが砕かれかけた。

□…おい主人、アレ使うぞ。

「…あれ？」

□そうだ。それでもしなければ勝てない。

「…あれ、しんどいんだけど。」

□言ってる場合か！さあやるぞ！

「…話は終わった？1人でボソボソと言ってたけど？」

「天子さ…さん！俺はこの一撃で事を終わらせませす。覚悟してくださいね！」

「…ふん、望むところよ。」

「行くぞ！」

□おうよ！

―パチュリー様直伝『プリンセスウインディーネ!!』  
更に…

―亜衣夢自作『ヴォルトサンダー!!』

これらを掛け合わせ…

『エレクトロニックウインディーネ!!』

その名と共に辺りを激しく閃光が包む。誰もがあまりの眩しさに目を開けられないほどの閃光が真っ直ぐ天子に向かって放たれる。魔本の使った魔法とは格段に威力に差がありその衝撃は地面の芝を焼き尽くしていた。

しかし…

「あら、まともなの撃てるじゃない。」

天子はやはり動くことなかった。その表情は余裕そのもの、亜衣夢の攻撃など効く由もないと語っていた。

「まあ、なかなかだったわよ。それじゃ、終わりよ。」

天子は大地に剣を突き刺した。すると、その地面から大岩がいきなり突き出てきて亜衣夢の魔法をいともたやすく防いだ。

「なん・・・だど?」

「この勝負、私の勝ちよ。」

— 非想の剣! —

また剣を刺すとその突き出ていた岩が砕け散り亜衣夢目掛けて飛んでいった。亜衣夢はそれを防ぐ魔法を唱える暇もなく、あえなく衝突してしまった。

「グッハア・・・」

「・・・勝負、ありね?」

「・・・そうね。もう亜衣夢は戦えない。まあ、なかなか面白かったわ。これで許してあげる。」

「そ、総領娘様! やりすぎでは!?!」

「なーに言ってるの? 殺してもいないし致命傷でもない。ただ気絶させただけよ・・・でもまあ、確かに面白かったわ。人間が魔法使っているのももの。」

「それでは、さっさと帰りますよ。怒られるのは私なのですから。」

「はい。じゃ、その人間によろしくね。」

そう言うとき天子と衣玖は飛び立ち、天上へと帰っていった。その後、亜衣夢が苦しげに起き上がった。

「痛・・・」

「亜衣夢？大丈夫なの？」

「はい、何とか。最初はまじでやばかったけど、なんとか回復しました…。」

「そう… それならいいわ。今日はもう休みなさい。部屋は既に直っているはずよ。」

「はい、そうさせてもらいます。」

そう言うのと亜衣夢はおぼつかない足取りで中へ戻った。昨夜とレミリアはその時謎の違和感を覚えていた。

「… おかしいわ。何故、あそこまで動けるの…？」

「お嬢様…。」

「… 何か、ありそうね。」



「…」

「俺の… プリン…。」